

---

# Powergame in The Hell (上)

粟吹一夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Power game in The Hell (上)

### 【Nコード】

N3327Z

### 【作者名】

栗吹一夢

### 【あらすじ】

交通故で死んでしまい靈魂となって漂っていた俺が、ソウルハンターの御上靈奈と名乗る金髪ゴスロリ少女に地獄に連れて行くと言われて、ついに行った所は、俺がいた世界「地界」の並列社会である「獄界」だった。

獄界には人の死亡を確実に予想する「エンマ」というスーパーコンピュータと靈魂を管理する「地獄」という施設があり、俺も地獄に行くはずだったのだが、俺は、俺達を襲って来た黒ローブを着た謎の男の肉体を得て獄界で生き返ってしまった。

「地界」に帰ることができなくなった俺は、霊奈の家、すなわち御上家に居候をさせてもらうことになったが、霊奈には家庭的な和風美人の姉「幽奈さん」と獄界のアイドル「妖奈ちゃん」という妹がいて、しかもその三姉妹の父親「龍岳さん」は獄界政府の政権与党「神聖自由党」の副幹事長をしている国会議員だった。

御上家で居候をさせてもらっているうちに何かしら自分でできることをしたいと考え始めた俺は、猛勉強の末、霊奈と同じソウルハンターになることができたが、その後、龍岳さんと一緒に神聖自由党本部を訪れてから、何故だか刺客に狙われるようになる。しかし、その刺客との戦いで俺が得た肉体に隠されていた超人的な能力が目覚める。

神聖自由党における派閥抗争と三姉妹の兄弟で三年前に死んだ「龍真さん」を巡る陰謀が明らかになれば、俺と霊奈は俺たちを襲って来た刺客達の黒幕の本拠地に取り込んで行った。

異世界を舞台とした活劇に、「政治」というスパイスを加味し、「死後の世界感」を添えてみました。

(前書き)

第三章の途中まで掲載。

## 第一章 プロローグ

### 綺麗な星空だ。

東京の郊外で生まれ、ずっとそこで育った俺が、こんなに輝いている満天の星空を見たのは初めてかもしれない。

しばらく気を失っていたようだ。気が付くと俺は仰向けになって星空を眺めていた。

俺は仰向けのまま首を左右に振ってみたが、見えるのは星空の続きだけだった。

そして俺は気が付いた。俺の背中には何も無いってことを。ベツトも地面も。

やれやれ。俺は夢を見ているようだ。

俯せになってみよう。何が見えるだろうか？

俺は首から肩を回すようにして俯せになった。そこには星の数ほどは多くないが、もっと明るい街の灯りが輝いていた。

俺は雲のように空に浮かんでいた。

んっ？ 俺の真下の道路で赤色灯が回転しながら輝いている。

その赤い光で蟻ん子のように人間が集まっていることが分かった。

俺は地上に降りることにした。

でも、どうすれば降りることができるんだ？

悩む必要はなかった。俺が降りたいと念じただけでゆっくりと高度が下がっていった。

道路に救急車とパトカーが止まっている。そのすぐ側にはボンネットがへこんだ乗用車が止まっていた。交通事故のようだ。乗用車がぶつかった相手はどこにいるんだろう？

俺が周りを見渡していると、救急車がサイレンを鳴らしながら走り出し、その場から去って行った。救急車がいたスペースに広がった視野の中にめちゃくちゃに壊れた一台のスクーターがあった。

どこかで見たことがあるような……。

警官が免許証らしきものを見ながら、パトカーのドアの窓から延ばした無線機に向かって大きな声でしゃべっていた。

「えー、免許証によると、被害者は『えいきゅうしんせい』。性別は男。生年月日は……」

変わった名前だな。俺の名前も結構変わっているとと言われる。

「永久真生」と書いて「ながひさまお」と読む。「まお」なんて女の子のような名前です。小さい頃はよくからかわれたものだが、今は「真に生きる」という意味が気に入ってたりする。一方、名字の方の「永久」を「ながひさ」とはなかなか読んでもらえない。「えいきゅう」さんなんて呼ばれることが多かった。

えいきゅうしんせい？ それって……。

俺は思わず警官の側に駆け寄った。ちょうどその時、小さな子供が人の輪の中から抜けて、パトカーに駆け寄ろうとした。

「あーこちら。ぼく。危ないから来ちゃ駄目だよ」

警官はその子供に向かって注意をしたが、すぐ近くまで来ていた俺は無視していた。

俺はもう高校生だし、許してくれるのかな？

俺は警官に近づき、警官が手に持っていた免許証をのぞき込んだ。そこにあつた写真には 俺の顔があつた。警官は俺の免許証を手にしてた。

「なんで俺の免許証を持っているんですか？」

俺は警官に向かって話しかけた。 っ て無視かよ！

俺は警官の肩をつついてみた。 が、できなかった。俺の

手はまるで3D映像のように警官の肩を通り抜けていた。

何なんだ、これは？

俺はもう一度、警官に話し掛けてみたが、また無視された。俺の  
声が聞こえていないのか？

いや、無視つてレベルじゃない。そもそも俺の姿すら見えていないよつだ。

俺は回りを見渡してみたが、野次馬の誰一人として俺に注目している奴はいない。ドラマで見たことがある現場検証をやっているまん真ん中に立っているというのに……。

そう言えば、俺は……どうして、ここにいるんだ？

確か……、高校二年生になって初めての金曜日の夜だった。

俺は愛用の原付スクーターに乗っていた。……そうだ。俺は妹の美咲に、夕食前にアイスクリームを買ってこいと命令されてコンビニに行つてたんだつた。

えっ、妹に命令されたつて？　　はははは。そうさ。俺は妹思いの優しい兄貴なのさ。

というのは嘘で、命令をきかないとお袋にどんな告げ口をされるか分からないからな。一昨日だつて、俺愛用のムフフな写真がいつぱいの大人の参考書の隠し場所をお袋に告つたらしい。定番のベッドの下ではなく、本棚に入れている本当の参考書の後ろに隠しておいたのに何で分かつたんだ？　……美咲の奴、俺がいない間に俺の部屋をがさ入れしていやがるんじゃないだろうな。まったく。

などと美咲に文句を言いたい事ばかりを思い出してもしょうがない。

もう一度、気を失う前のことを思い出してみよう。……コンビニでアイスクリームを買った記憶は無い。そうすると……俺はコンビニに行き着いてないということか？

スクーターに乗つて、次の角を曲がるとコンビニが見えるという時に……。そうだ。車のヘッドライトの光に目が眩んで、その後……。後……。

さっきの救急車で運ばれて行ったのは、ひよつとしたら……。この辺りから一番近い救急病院は、……あそこだ。よし！　行つてみよう。

俺は救急病院に向かって走つて行った。でも、足が地面を蹴つて

いる感覚はなく、立ち泳ぎのように浮かんで前に進んでいるって感じだ。

十分ほどで救急病院に着いた。普段、全力疾走をするとすぐに息が切れるが、今日はまったく息が切れなかった。……って、息しているのかな、俺？

俺が救急病院の入り口に辿り着くと、丁度、タクシーが車寄せに停まり、中から親父とお袋、そして妹の美咲が降りてきた。

「よお」

俺はみんなに手を振りながら声を掛けたが、やっぱり誰も俺がいることに気が付かないようだった。

親父達は俺を無視して建物の中に入って行った。俺もみんなに続いて行った。

建物に入るとすぐに受付のような所があり、そこに一人の白衣を着た男がみんなを待っていた。白衣を着た男は、沈痛な表情で親父達にこう告げた。

「最前を尽くしましたが、搬送されてきた時には既に心肺停止状態でした。どうぞ、こちらに」

そう言つと、白衣の男は振り向いて薄暗い廊下を歩きだした。後を親父達が無言で続く。

これは夢だ。夢なんだ。これからどんな展開になるうとも驚く必要はない。

そう自分に言い聞かせながら、俺は俺はみんなの後を付いて行った。

白衣を着た男は、廊下の奥にあったドアの前で立ち止まった。

その部屋の入り口には……「霊安室」というプレートが掛かっていた。

白衣の男がスライド式のドアを引いて中にみんなを案内した。

窓も無い暗い部屋の正面に、簡単な祭壇が蝋燭を模した電灯の明かりで浮かび上がっており、その手前に置かれたベッドの上に白いシーツに覆われた「もの」が横たわっていた。



白衣の男がシーツを半分だけはだけた。そこには……、間違いない、俺が横たわっていた。ヘルメットを被っていたせいかな顔には大きな傷はなかった。

「真生！」

「お兄ちゃん！」

お袋と美咲が叫ぶと泣き崩れてしまった。親父は憔悴しきった顔で横たわる俺に近づき、無言で俺の顔を撫でていた。

そうだ。やっぱりこれは夢だ。いつかは醒める夢に違いない。そう思いたい。俺の遺骸に寄り添って悲哀にくれる家族の様子なんて見たくはない！

俺は振り向いて部屋の外に出た。……って、あれ？

慌ててしまつて、ドアを引くのを忘れたけど、ちゃんと俺は廊下に出ていた。

どうやら、今の俺は壁とかドアは通行の障害物にはならないようだ。なんてつたつて、俺は3D映像にすぎないんだからな。

とにかく、……この悪夢が醒めるまで、ちよつと散歩でもしてこよう。

俺は病院を出て、どこに行くとも決めずに歩き出した。

気がつくと、俺は自然に歩き慣れた通学路を進んでいた。……そうだな。とりあえず学校にでも行ってみるか。

通学路の途中にある商店街はいつもの賑わいを見せていた。俺には買い物籠を持って道の真ん中でおしゃべりしているおばちゃん達の話はうるさいくらいに聞こえるのに、俺がおばちゃん達に話しかけても完全無視だったし、おばちゃんの頭に空手チョップを喰らわしてみても、俺の手はおばちゃんの頭を通り抜けていた。

まだ夢は覚めていないようだ。……もうちよつと歩いてみよう。

学校の帰りによく寄っていた中古ゲーム店が見えてきた。ちよつと入ってみるか。

おお、「放課後はラブチャンス」が入荷しているじゃないか。これ、やってみたかつたんだよなあ。俺的には恋愛エロゲの金

字塔だ。ちよつと仲良くなっただけで、すぐにベッドインするヒロインは御免だ。やっぱり恋愛感情を究極まで高めて、二人の愛を確かめ合いながらエロスの世界へ……。これですよ、これ！

俺はパッケージを持つとしたが、俺の手はパッケージを擦り抜けるだけだった。……もう、このゲームもできないのか。

思い起こせば彼女いない歴十七年の寂しい人生だったなあ。顔の造作は人並みだと思っているけど、女の子からモテたことはない。勉強や運動も平均点のちよつと下辺りをウロウロしているし、趣味はパソコンゲームとネットサーフィン……。オタクであることは自認している。

俺はため息をついて中古ゲーム店を出て再び商店街を歩き出した。このまま学校に行っても、誰とも話ができないんじゃないかな。行っても仕方がないよな。

俺、これからどうすればいいんだろう？ ずっとこのまま誰にも気づかれずに漂っているしかないのかな？

## 第二章 獄界

「あゝつ、やつと見つけた！」

俺の背後で女の子の声がした。

どうせ俺に話し掛けているんじゃないだろう。今、俺は、みんなから見えない存在みたいだからな。

「ちよつと、あんたよ、あんた。……止まりなさいよ！」

痴話喧嘩か？ 早く謝つてしまえよ。

「ちよつと待ちなさい！」

俺に呼びかけているのか？

俺は立ち止まって振り返ってみた。

そこには黒いゴスロリ調のドレスを着た金髪の女の子が立って、両手を腰に当てながら俺を睨んでいた。秋葉原ならまだしも、こんな郊外の商店街ではどう考えても似つかわしくない格好だ。

ちよつとイツちよつちよつしている、あぶないコスプレ女？ ……

…無視しよう。

俺は再び前を向いて歩き出した。

「ちよつと待ちなさいよ。永久真生！」

えっ、俺？ ……やっぱり俺を呼んでいたのか？

しかし、俺は金髪のコスプレ女に知り合いはいないぞ。

俺はもう一度振り返ってコスプレ女の顔をじっくりと見てみた。

「え〜と、…どこかでお会いしましたっけ？」

「あんたとは初対面よ」

やっぱりそうだな。何度かコスプレ会場には行ったことはあるが、コスプレしている女の子に声なんて掛けたことはない。

でも初対面のコスプレ女が俺に何の用だ？

「あんたはそのまま空に浮かんでいるんだと思ってずっと空を探していたのに…。あちこち探し回っちゃったじゃない」

「お、俺を捜していたって？」

「そうよ。あんたを！」

そう言うのと、コスプレ女はつかつかと俺に近寄って来た。

近くで見るとコスプレ女はけっこう可愛かった。

金色の髪に黒いカチューシャを付けていて、後髪は背中の中ほどまでであったが、横の部分はそれぞれ両耳の横で小さく三つ編みに編んで、その先端を結んでいる小さな黒いリボンが胸の辺りで揺れていた。

長い睫に縁取られた大きな目には緑色の瞳が輝いており、鼻は外国人にしてはこじんまりとしている感じで、薄い唇の口からは八重歯が一つ覗いていた。

身長は俺より十センチほど低いくらいかな？

襟から肩口にかけてと袖口の部分はレースの装飾が施された白い布地でそれ以外は黒一色のドレスは、ウエストをキュツと絞った形で、逆にスカートはフワツとしたシルエットで、膝下辺りにある裾にも白いレースの装飾が施されていた。スカートの下にはダークグレーのタイツを履き、黒のストラップシューズはピカピカに磨き上

げられていた。

ドレスのウエストが絞られているせいかもしれないが胸はけっこの大きく見えた。

あっ……………いや、自然に目に飛び込んで来たんだからな。

俺が女性を見る時は常に胸を凝視している訳ではないから誤解はないでくれよ。

「さあ、行くわよ」

コスプレ女は右手で俺の左手を掴んで、俺が歩いてきた方向に向かって俺を引っ張って行った。あっけにとられていた俺はコスプレ女に引っ張って行かれるままについて行くしかなかった。

でも、女の子の手って柔らかくて暖かいんだなあ。

女の子と手を繋いだことのない俺はしばらくプチな幸福感に浸っていた。

えっ、……………柔らかくて暖かい？

俺は何も掴めないし誰にも触れることもできなかったはずだ。しかし、このコスプレ女に手を握られている感触はしっかりと感じるこ

とができた。  
どうして……………って考えるのは後にしよう。俺が見えて俺と話すことができる人間がいたことで何となく安心できたし、もうちょっと女の子の手の感触を楽しんでいたい。

俺とコスプレ女は商店街の中を歩いて行ったが、コスプレ女も俺と同じように誰ともぶつからずに通りを真っ直ぐ歩いていた。それにどう考えても場違いなコスプレ女と手を繋いで歩いているのに、商店街で買い物をしているおばちゃん達や八百屋のおじさんも俺達の方にはまったく視線を向けていない。どうやら俺と同じようにコスプレ女も見えていないようだ。

コスプレ女は脇目もふらずに俺の家とは反対方向に早足で歩いて行った。この道をまっすぐ行くと川の堤防の上を走っている道路に突き当たって、そこを左に折れた先の橋を渡れば、俺が通っていた公立高校もすぐ近くだ。

そういえば、どこに行くのか聞いてなかったぞ。このままホテルへゴーってことはないよな。……いや、それは俺のこだわりが許さない。やっぱり恋愛感情を究極まで高めてからじゃないと……って、まあ、何回も力説することもないか。

「あ、あのさ……、どこに行くんだ？」

「地獄に決まっているじゃない」

コスプレ女は立ち止まることもなく前を向いたまま言った。

「地獄……。ああ、地獄か。そうだよな、死んで行く所という天国か地獄しかないよな。……って何だよ、地獄つて！俺は地獄に墮とされるような悪い事なんて何もしてないぞ！」

俺は握られていた左手を振り解いて立ち止まった。

確かに人から感謝されるようなことはした覚えはない。しかし人に迷惑を掛けたつもりもない。何で俺が地獄に墜ちなきゃいけないんだ。

立ち止まって俺の方に振り向いたコスプレ女は、一瞬怒ったような顔をしたが、すぐに物分かりの悪い子供を諭すようにやさしい笑顔を見せた。

「これから行く地獄は、たぶん、あんたが持っているイメージとは違う所だから。心配しないで良いわよ」

「心配しないで良いって言われても地獄なんだろう。鬼に虐められたり、熱湯風呂に入れられたり、串刺しにさせられたりするんだらう？」

「あんだ、アニメの見過ぎよ」

「アニメじゃなくて一般的にそう言われているの」

「だから……。そうね。……まず、今、あんたが言った天国というものは存在しないの」

「えっ？」

「死んだ人の靈魂が行く所は地獄しかないのよ。人は死んだら、みんな地獄に行くの」

「天国が無いだって？ それじゃ、生前に良い事をした人はするだ

け損だつたつてことか？」

「何、その理屈？ 天国に行きたいつて理由だけで良い事をするの？ 馬鹿じゃないの！」

くおのやろう。けっこう可愛いと思つて下手に出てりゃ、人を馬鹿呼ばわりかよ。何様なんだ、こいつは？

「あのなあ、お前はいつたい誰なんだ？ いきなり俺の前に現れて、俺を地獄に連れて行くなつて言いやがつて。お前は地獄から来た死神なのかよ？」

「正解。よく分かつたわね」

えっ、……………このコスプレ女が死神？ 俺が持っている死神のイメージは、黒いローブを羽織つた骸骨つていうイメージなんだが、コスプレ女の黒いドレスはどちらかという魔女っぽいイメージだぞ。

「私は、あんたのような肉体を失つた靈魂を探し出して地獄に案内する者よ。そういう意味ではあんたが言う『死神』に該当するわね。でも念のために言つておくと正式職名は『靈魂探索捕獲者』、通称『ソウルハンター』よ」

ソウルハンター？ どこかの秘密工作員のコードネームみたいで、ちよつと格好良いかも……………などと感心している場合ではない。

ハンターなんだから、俺が地獄行きを拒否したつて、檻とかに入られて否応なく地獄に連れて行かれるんだろうか？ 一応確認しておくか。

「俺が地獄には行かないと言えはどつなるんだ？」

「他に選択肢は無いわよ。私が引つ張つて行くだけ」

「それじゃ俺が暴れたらどうする？」

「眠らせることもできるわよ。でも、あんただつて眠っている間にこの世界とお別れするのは寂しいんじゃないの？ 最後まで、この世界の景色を見ておきたいでしょう」

ハンターなら麻醉銃の一つや二つは持っていそつだ。せつかく地獄に行くのなら、それまでの道程を見てみたい気もする。どうせ二

度と見ることは無いんだからな。

「それに、あんたももう分かっていると思うけど、靈魂のあんたはこの世界の誰とも話したり触れ合ったりすることはできないのよ。

ただ、自分の知り合いの周りを漂っているだけ。それでも良いの？」

確かに、それはそれですごく辛いことだ。自分の家族や友達が楽しそうに話していてもその仲間に入れないし、パソコンを操作して自分の趣味に没頭することもできない。そんなんじやこの世界にいう意味が無いよな。

「地獄に行けば、あんたと同じ靈魂仲間が大勢いるから寂しくはないわよ」

「同じ靈魂同士だと、しゃべったり触れ合ったりできるっていうことなのか？」

「そうよ」

「それじゃ、お前と話したり手を握ったりできるといことは、お前も靈魂なのか？」

「そう、今の私は靈魂よ。ただ、あんたと違うところは、私の身体はまだ死んでいないということ」

「えっ、どうということだ？」

「幽体離脱って聞いたことがあるでしょう。私達ソウルハンターは幽体離脱をすることができるの」

「わざわざ幽体離脱をして、俺を迎えに来てくれたってことか？」

「そういうこと。それから地獄はあんたが思っているような虐められる所じゃないから。どっちかという気持ち良いことをしてもらえるわよ」

「き、気持ち良いこと？」

「コスプレしている女の子に「気持ち良いこと」って言われると、あのことしか頭に浮かばないんだが……。めくるめく快樂の波状攻撃……があるのかな？」

「さあ、どうするの？ 大人しく私についてくる？ それとも眠りながら行く方が良い？」

そりゃあ気持ち良い方が良いに決まっている！

それに、……コスプレ女が言ったみたいに、このままこの世界にいても俺は何もできない。つまり独りぼっちで過ごすことだ。

確かに俺は引き籠もりとまでは言わないがオタクなインドア少年だった。母親や妹が鬱陶しくて、いなくなれば良いのにと思ったこともあった。でも、ずっと一人はやっぱ寂しい。ドアを開ければ家族や友達といつでも話ができるという安心感があったからこそ、一人の時間を堪能できていたような気がする。

「分かったよ。お前について行くよ」

「賢明ね」

そう言つとコスプレ女は再び俺の手を握って歩き出した。

俺はコスプレ女に手を引かれて、通学路に掛かっている橋のたもとまでやって来た。この橋の所で川は若干狭くなっているが、兩岸に結構広い河川敷が広がっていて、コンクリート護岸の階段を降りると河川敷まで出ることができた。

俺が小学生の頃は、この河原でフナ釣りやザリガニ採りをよくしたものだ。しかし、中学校一年生の時に、フナ釣り中に誤ってこの川に落ちて溺れてからは外で遊ぶことが苦手になってしまい、それ以降はパソコンの前にいることが多くなった。俺のオタク趣味は、その時から始まったんだ。

河原に下りると、岸にボートが繋がれていた。公園の池なんかでよく見るグラスファイバー製ではなく、木造のボートだった。

地獄に行くつて言ったよなあ。地獄への道すがらにある川といえ

ば……。  
「あのさ、ちょっと確認したいんだけど、これって三途の川の渡し？」

「そうよ。いかにも死んだっていう雰囲気が出るでしょ」

「……雰囲気だけなのか？」

「トランスポイントまで、ひょいと飛んで行く方が良かった？」

「何だ、トランスポイントって？」



「この世界と地獄のある世界とを繋ぐ時空トンネルよ」

時空トンネル？ 地獄も時代の波に取り残されないようにS  
Fチックな用語を使うようになったのだろうか？

「時空トンネルって言うことは、地獄はこの世界とは違う時空にあるということなのか？」

「並列世界って聞いたことがあるでしょう？ 地獄は同じ地球上にあるもう一つの時空世界にあるのよ。これからトランスポイントを通じて地獄のある世界、私達が『獄界』と呼んでいる世界に行くの」

よく「地獄に堕ちる」と言われるけど、どうやら、地獄に行くには「堕ちる」のではなく、時空を「超える」必要があるようだ。

「並列世界っていくつもあるのか？」

「私達が確認できているのは、獄界と地界の二つだけよ」

「地界？」

「今いる、この世界のことよ」

並列世界にある地獄。死んだら「あの世」に行くと言うことはあながち間違いじゃなかったってことだな。

「さあ、乗って」

コスプレ女は先にボートに飛び乗ると、俺の手を取ってボートに誘った。

そう言えば、女の子と一緒にボートに乗ることもなかったなあ。

妄想のデートコースには必ず入っていたけどね。死んでからやっと現実のものになるとは……。

俺がボートの前の方に後ろを向いて座ると、ボートの後部に前を向いて座ったコスプレ女が不思議そうな顔をして俺の顔を見ていた。「何でこっち向いて座るの？」

「だってボートだろう。俺も公園でボートに乗ったことくらいはある。ボートを漕ぐのは男の役目だ」

もっとも、デートのリハーサルとして、一緒に乗ったのは男友達だったけどね。

「漕ぐ？ その必要は無いわよ」

コスプレ女がそう言うと、ボートは音もなく前に進み出した。丁度、人間が漕いでいるくらいの速度だった。エンジンでも付いているのかと思っただが、コスプレ女が何かを操作しているようではなかったし、エンジン音もしなかった。

俺は慌てて前方に向き直った。ボートは川の下流に向けて進んでいたが、前方の景色が何となくぼやけているように見えてきた。

「あそこを抜けるともう獄界よ。この景色を目に焼き付けておきなさい」

「いよいよこの世界、 地界って言ったよな ともお別れか。」

でも、……………その前に、やっぱり俺は確認しておきたいことがあった。

「なあ、死神さんよ」

俺は後ろを振り返りながらコスプレ女に話し掛けた。

「ちよつと！ 私は『死神さん』なんていう名前じゃないわよ」

「自分で『私は死神です』って言ったじゃないか」

「名前もそうだとは言っていないじゃない。私には姓は御上、名は霊奈というちゃんとした名前があるんだからね」

「みかみ……………れいな？」

「そうよ。御中の御、上、靈魂の霊に奈落の奈」

「へえ、……………って外国人じゃなかったのか？ なんで漢字の名前なんだ？」

「何、外国人って？」

「えっ！ ……………あのさ、獄界には国というものは無いのか？」

「国って、地界にある目に見えない愚かな境界線のこと？」

「まあ、はずれてはないけど……………」

「そんなものは無いわよ。それと私達の世界の言葉は漢字とひらがなで書き表すのよ」

「それって日本語ってことだよな」

「まあ確かにあなたが住んでいるこの地区で話されている言語と同

「であることは確かね」

日本語が獄界における世界共通語ということなのか。獄界ではいつ日本が世界を征服したんだろう？

「いやいや、そんなことより獄界に行く前に確認しておくことがある！」

「それじゃあ、霊奈。最後に一つだけ訊きたいんだが……」

「何？」

「俺は本当に死んでしまったんだよな？」

「今更そんなこと言っているの。察しが悪いのね。それとも本当に馬鹿なの？」

悪かったよ。察しが悪いんじゃないよ、自分が死んでいることをできればまだ認めたくないんだよ。

「あんたは確かに死んでいるわよ。横からやって来た車に追突されて、スクーターごと十メートルは吹き飛んだ。肋骨が三本折れて、内臓が破裂、それから……」

「止めてくれ！　そ、そんなに自分が死んだ時の状況まで詳しく教えてくれなんて言っていない」

俺は思わず両耳を手で塞いでしまった。頭の中に、迫ってくる車のヘッドライトがフラッシュバックされた。

「あんたが訊いてきたんじゃない」

霊奈はソウルハンターって言うくらいだから、何人もの靈魂の抜けた肉体、つまり死体を見てきているんだろう。グロいこともサラリと言いやがる。

「……でも、お前は どうしてそんなに詳しく知っているんだ？　どこかで俺が死ぬところを見てたのか？」

「残念ながらあんたが死ぬシーンには間に合わなかったわ。でも、あんたがどんな風に死ぬのかは、あんたの死亡予定レポートに書いてあるわよ」

「死亡予定レポート？」

「そうよ。死亡予定レポートには、どこの誰が、いつ、どうやって

死ぬかが記載されているの。私達ソウルハンターはそれに従って靈魂を回収に来ているのよ」

「それって神様が書いているのか？」

「神様じゃなくてエンマよ」

「閻魔大王が？」

「閻魔大王じゃなくてエンマ。そのうち分かるわよ」

やっぱり俺は死んでしまって、今の俺は靈魂なんだ。まあ、靈奈以外の誰にも触れることができなかった時点で何となく分かっていたけど、自分が死んでしまったなんて、すぐに納得できる奴はそんなに多くないはずだよな。

しかし……、靈魂すなわち幽霊っていうのは白い三角布を頭に巻いて、白装束というドレスコードじゃなかったっけ。今の俺の格好は、コンビニに行っていた時と同じグレーのパーカーとジーンズだ。それに肋骨が三本折れたっていうわりには体は何ともないし傷も無い。

俺は再び靈奈の方に向き直って靈奈に話し掛けた。

「靈奈。俺は、これからこの格好のままなのか？」

「それはあんたが死んだ時の姿を記憶しているからよ。肉体を失った靈魂は、その中に蓄積されている自分の記憶を逆再生させながら、徐々に生前の記憶を失っていくの。つまり、靈魂であるあんたは十年後、七歳頃のあんたの姿に変わっているはずよ」

「若返っていくということなのか？」

「そういうことね」

「服はどうなるんだ？ 服も七歳の頃に来ていた服に替わるのか？」

「生きている場合、自分の肉体を変えることはできないけど、服は着替えることができるでしょう。死んで靈魂になってからも同じよ。肉体の記憶は刷り込まれていて自由に換えることはできないけれど、服装のイメージは何とでもなるわよ。他の服をイメージしてご覧なさい」

よし！ 俺は学校の制服をイメージしてみた。すると、一瞬のう

ちに俺の着ている服は制服に変わった。

服を買わなくても一瞬にして自分の好きな格好ができるんだから、地獄には洋服店は無いようだな。

しかし、自分の容姿も自由に変えることができたらなあ。もう、肉体は無いんだから、霊魂での姿くらい自分で好きな容姿に変えられるようになってもいいようなものなのに。

例えば、もうちょっと背を高くしたいし、筋肉も付けたい。マッチョなオタクっていうのもあって良いだろ？

俺は一瞬マッチョメンになった自分の姿を想像してみた。そう。風呂上がりで脱衣場の鏡の前でポーズを取っている俺の姿を……。

俺は無意識のうちにボディビルダーのようなポーズを取っていた。見よ、この腹筋を！ って、腹筋を確認すべく下を向いた俺の視線に飛び込んできたのは………割れていない腹筋の下に何も履いていない下半身だった。

な、なんで！ 慌てて前を隠したが、目の前の霊奈は顔を真っ赤にしながら、鉄拳を俺の脳天に下しやがった。

「この変態！ あんた、女の子の前で素っ裸になる趣味があったの？」

「ち、違うよ。体は変わらないって言われたから、ちょっと確認しようと思っただけだよ」

「早く服をイメージしなさいよ。この馬鹿！ 露出狂！」

二発目の鉄拳を喰らった俺は、揺れるポートの上から落ちないようにバランスを取りながら、急いで普段着のトレーナーとジーンズをイメージすると、すぐにその服が俺の体を覆った。

「まったく！ 今度、服を脱いたら殺すからね！」

いや、俺、既に死んでいるんですけど……。

「そろそろトランスポイントを通過するわよ」

一層、不愛想になった霊奈が進行方向を向きながら言った。

俺は再び前方に向き直った。前方がぼやけて見えていたのは霧が掛かっていたからだだった。霧は次第に濃くなっていき、辺りをすっ

ぼりと覆ってしまつて何も見えなくなつてしまつた。

しかし、霧はすぐに晴れてきて周りの景色が見えてきた。ボートが発して三分も経つていないのに見えてきた景色は俺の知らない町の夜景だつた。もつともそれは俺が行つたことがない場所というだけで、電柱もビルもマンションもある普通の町並みの風景が広がつていた。並列世界というから、どんな未来的な風景が広がるのかとちよつとは期待をしていたのだが、在り来たりの景色だつた。

空を見上げると地界と同じように満月と満天の星が明るく地上を照らしていた。

「もう時空を越えたのか？」

「そうよ。ここはもう獄界よ」

「それで地獄というのはどこにあるんだ？」

「ここからはちよつと離れている所にあるわ。だからちよつと乗り物に乗つて行くから」

音もなく進むボートの先に船着き場のような場所が見えてきた。

川岸に一つ灯っている街灯の明かりで、川岸から渡された板が小さな栈橋のように突き出しているのが見えた。

ボートは吸い寄せられるかのように静かに栈橋に近付いて行つた。接岸すると、まず霊奈がひらりと栈橋に降り立ち、俺も続けてボートを降りた。

「こつちよ」

霊奈は、栈橋を川岸に向かって歩き出した。その先の河原には、よく工事現場にあるような、二階建ての小さなプレハブ造りの建物が建つていた。栈橋を渡りきつた所にその建物の入り口があつた。プレハブ作りの建物には不釣り合いな、曇りガラスが真ん中から左右に開く自動ドアのようだつた。

入り口の横には「靈魂管理庁靈魂搜索部第三百三十三支部」と書かれた看板が掛かつていた。

霊奈が入り口の扉の鍵と思われる部分に右手をかざすと、扉は音もなく左右に開き、同時に部屋の灯りが点いた。

「入って」

霊奈に続いて俺もその建物の中に入ると、俺の後ろで扉は音もなく閉まった。

建物の中は二十畳ほどの広さで、今、入ってきた扉の反対側にもう一つの同じような扉があり、その近くの壁沿いには二階に上がるための内階段がある以外は、窓も机もキャビネットも何も無い一つの大きな四角い部屋だった。その部屋の中央に一つだけ椅子があり、霊奈と同じ格好をした女の子が座っていた。眠っているのか身動き一つしていない。

その女の子の近くまで行って、よく見てみると、霊奈とそっくりの女の子だった。霊奈は双子だったのか？

「これは？」

「これは私よ」

「えっ？」

「さっき私は幽体離脱をしているって言ったでしょう。ここに座っているのは霊魂が抜けた私の肉体よ」

「霊魂が抜けた肉体って……、死体ってこと？」

「違うわよ。霊魂が抜けてもこの私の肉体は生きているわよ。もつともそれは生命維持のための最小限の生物学的活動をしているだけだけどね」

「霊魂がなくても人間は生きていられるということなのか？」

「霊魂と生命は違うのよ。霊魂はその肉体に宿って精神的活動を司るためのものなの。植物人間状態になった時も実は霊魂がその肉体から離脱してしまっている場合もあるのよ」

霊奈はそう言うと、座ったままの霊奈に近付いて行き、座っている自分の上に更に座るような格好をした。すると、今までピントがずれてだぶって見えていた二人の霊奈が、次第にピントが合うように一つになっていった。上に座っていた霊奈が下に座っていた霊奈に吸い込まれていったようだった。

一つになった霊奈が目を開けて立ち上がった。

「お待たせ。さあ、行きましょう」

「ちよつと待つてくれ。霊奈の霊魂は今、肉体に戻ったわけだよな？ 霊魂同士じゃなくなつたつていうのに、どうして俺と霊奈は話ができるんだ？ それにどうして俺を見ることができるんだ？」

「死んだというのに意外と冷静じゃない。じゃあ、私の手を握つてみて」

俺は霊奈の手を握ろうとしたが、俺の手はすり抜けるだけで霊奈の手を握ることはできなかった。

「霊魂が肉体を有している者と話をしたり触れ合ったりすることができないのは獄界も地界も同じよ。でも私があんたを見ることができたり話をするのができるのは、私がソウルハンターだからよ」

「ソウルハンターは、幽体離脱して霊魂にならなくても、霊魂を見たり霊魂と話したりできるといふことか？」

「そうよ」

「それじゃ、何で今まで幽体離脱していたんだ？」

「トランスポイントは肉体を有したままじゃ通過できないの。だから、地界の霊魂を回収するためには幽体離脱をする必要があるのよ」

霊魂だけが時空を超えることができるつてことか。そうすると幽霊の何人かは異世界人かもしれないということだな。

「さあ、行くわよ」

霊奈は入つて来た側とは反対側にある扉に向かい、同じように右手を扉の中央にかざすと扉は左右に開いた。

外に出ると、幅十メートルほどの河川敷があり、その先には堤防の上に行く階段状の道があった。

「堤防の上にエア・スクーターを置いてあるからついて来て」

何だ、エア・スクーターつて？ まあ、霊奈について行くしかなんだから黙つてついて行くか。

霊奈の後に続いて堤防の近くまで歩いて行つた時、後ろから男の声が出た。

「待て！」



低く小さな声だったが、靈奈にもはつきりと聞こえたようだ。靈奈と同時に後ろを振り向くと、黒いローブで全身を覆った男が、今俺達が出てきたプレハブ建物の扉のすぐ外に立っていた。頭に深く被ったフードの中は暗く、顔を見る事はできなかった。

「何者？」

靈奈は俺の横に進み出て、左手を腰に当てながら挑戦的な目で黒ローブの男を睨んだ。

「解放戦線の刺客？ それとも単なる物盗り？ まあ、どっちでも良いわ」

「お前に用は無い。私があるのはその靈魂の方だ」

靈奈は意外そうな顔をして黒ローブの男を見つめた。

「……この靈魂を？ ……何が目的？ この靈魂がそんなに珍しいの？ どこにでもいる靈魂よ」

「私はその靈魂が欲しいのだ。お前には迷惑は掛けない。その靈魂を置いていけ」

「私はこの靈魂を地獄に送り届ける使命を負っているの。あなたに横取りされることが迷惑なのよ！」

「相変わらず強情な奴だ」

「………あなた、いったい誰なの？ 私にはあなたのような無礼な知り合いはいないわよ！」

どうやら、黒ローブの男は俺に用があるらしいが、俺も靈奈同様、黒ローブを着ている男に知り合いはいない。 いったい俺に何の用事があるんだ？ 俺にもコスプレをさせたいのか？

「とにかく、お前はそのまま帰るんだ。何も問題は無い」

「お断りよ！」

靈奈はそう言い放つと、一旦、顔の所まで上げた右手を勢いよく体の横に振り下した。すると、どこから取り出したのか、その手にはほのかに青白く輝く細身で諸刃の剣が握られていた。

死神っていうのは嘘で本当は手品師じゃないのか？ それにそんなの取り出して、いったい何をするつもりなんだよ？ そんな

もの振り回していたら、警察がやって来て銃刀法違反で逮捕されちゃうぞ。

しかし、黒ローブの男も警察を呼ぼうともせず、また慌てている様子もなかった。

「仕方が無い」

黒ローブの男はそう言うと、霊奈と同じように勢いよく右手を体の横に振り下ろした。黒ローブの男の右手には青白く輝く大きな鎌のようなものが握られていた。

黒ローブの男の容姿は確かに死神というイメージだ。死神の持ち物といえば鎌だよな。もつとも草刈りで使う鎌どころではなく、とつともなく大きい。柄の部分も刃の部分と一体となっている金属製のようで、全体的に微妙なカーブを描いており、刃の部分には装飾なのか実用なのか分からないがトゲのようなものがいくつも飛び出していた。

何なんだ、こいつら？ 俺を取り合って決闘でもするつもりか？ 男女を問わずこんなにモテたことはない俺としては、ちょっと複雑な心境だ。どうせモテるんなら生きているうちにモテたかったぜ。

しかし、決闘はすぐには始まらなかった。霊奈は青白い顔をしながら目を見開いて黒ローブの男が持っていた大鎌に見入っていた。

「その武器は？ ……その武器をどこで手に入れたの？」

「これ以上、お前に話すことは無い。最後にもう一度言う。その靈魂を置いていけ」

「嫌だと言ったら？」

霊奈がそう言った瞬間、黒ローブの男が消えた。

いや、俺には消えたと見えただけで、実際はものすごいスピードで霊奈に向かって突進していた。俺の視線が黒ローブの男の動きに追いついた時には、黒ローブの男は霊奈に大鎌を打ち込んでいた。

しかし、霊奈は、黒ローブの男の一撃をなんなく自らの剣で跳ね返したと思うと、黒ローブの男の身長の二倍くらいの高さに跳躍し

て、空中で回転しながら黒ローブの男の背後に着地した。それと同時に霊奈が横に剣を払ったが、黒ローブの男も前回転しながら身をかわし、すぐに霊奈に向き直った。その後、霊奈と黒ローブの男は何合か剣と大鎌を打ち合い、そのたび青い火花が散ったが、容易に勝敗は着かなかった。

霊奈は息を切らしながらも驚いた様子で黒ローブの男を見つめていた。

「解放戦線の屑じゃないみたいね。この靈魂を欲していることも怪しいし……」

「……………」

黒ローブの男は無言で大鎌を構えつつ、霊奈の方から注意を反らすことなく俺の方にじわじわと近づいて来た。

「させない！」

霊奈が俺の前に立ち塞がろうと突進して来たその時、黒ローブの男は大鎌を霊奈に向けて投げつけた。咄嗟のところまで飛んできた大鎌を避けた霊奈だったが、それで体勢が崩れてしまった。黒ローブの男はその機を逃さず、ブーメランのように戻ってきた大鎌で霊奈の剣を跳ね飛ばした。霊奈の剣は弾かれ宙を舞い、はるか後ろの地面に突き刺さった。

倒れた霊奈が起き上がるうとした時には、霊奈の首筋には黒ローブの男の大鎌が突き付けられていた。

このままだと霊奈が危ない！

「おい、待て！」

おいおい。何で俺は黒ローブの男に声なんて掛けているんだ？ 相手は大鎌を振り回している危ない奴だぞ。俺は虐められている女の子を助けるような度胸なんて元々持ち合わせていなかったはずじゃないか？ どちらかというヘタレな俺なのに……。

いや、そんなヘタレな俺だからこそ女の子が殺されようとしている場面を目の当たりにして冷静ではいられなかったのかもしれない。でも黒ローブの男が俺に向かって来たらどうしよう？ 俺も

一緒に殺されてしまうかも。……………って待てよ。俺はもう死んでいるんだよな。……………そうすると俺はもう死ぬことはない。……………はははは。なんて無敵なんだ。もう怖いものなしだ。

「その子を離せ！」

「良い根性だ。しかし今のお前に何ができる？」

そう、何もできないだろう。だって、大鎌を持った男と喧嘩したことなんてないし、そもそも喧嘩は嫌いだ。でも俺は霊奈を助けたかった。

ついさつき初めて会った奴なのに何故だ？ ……ああ、もうどうにでもなれだ。

俺は黒ローブの男に向かって突進した。

しかし黒ローブの男が左手を払うと、まるで風で飛ばされた凧みたいに、俺は五メートルほど吹っ飛んで行き地面に倒れた。

「そこで待っている」

黒ローブの男は右手で持った大鎌を霊奈に突き付けたまま、何やら呪文のような言葉を呟いたと思うと左手を天に向かって突き出した。

その瞬間、目の前がものすごい光で覆われた。

そうだ。死ぬ前に見た車のヘッドライトみたいなの……。いや、ヘッドライトどころの光じゃねえ。目がつぶれるかと思っただくらいだ。その後、すぐに轟音が響き渡った。耳で聞こえたというより体全体が轟音に包み込まれた感じだ。

何かが爆発したとしかいえないような光と轟音だったが体は衝撃を感じなかった。

俺は上半身を起こして辺りを見渡してみても、プレハブの建物もそのまま、爆発があったような形跡はなかった。

すぐ側に霊奈が倒れていた。意識が無いようだ。俺は霊奈に駆け寄ると、上半身を抱き起こし大声で名前を呼びながら霊奈を揺さぶった。

「霊奈！ 霊奈！」

「うん」

霊奈は呻きながら弱々しく目を開けた。

「あっ、あんたは……………！」

俺の顔を見ていた霊奈の視線が少し下がると、霊奈の顔がみるみる真っ赤になった。

再び俺の顔に視線を戻した霊奈の顔は怒りで震えていた。

「この変態！ 露出狂！」

すくつと立ち上がった霊奈の鉄拳が片膝をついていた俺の脳天を直撃した。

「な、何をしやがる！ 俺が一体何をした？」

俺も立ち上がって霊奈に詰め寄った。

「白々しい。自分の格好を見てみなさいよ！」

俺の格好……。俺が視線を下に降ろすと、そこには……、着ていたはずの服がなくなっていた！ 何で、また素っ裸になっているんだ。俺は？

とりあえず両手で股間は隠した。

「早く服をイメージしなさいよ！」

「お、おう」

俺はさっきまで着ていた普段着をイメージした。

しかし、服は現れなかった。

「早くしなさいよ！ それとも私にその貧弱な体をもっと見せびらかしたいの？」

俺の体のどこを見て貧弱って言っているんだよ？ まあ、確かに

自信は無いけどさ。

「ち、違うよ。服が出ないんだ」

「そんな馬鹿な！ 死んでからも変態的欲望を満たそうとするあんたは地獄で浄化させる価値もないわよ！」

霊奈は俺の左頬にビンタを喰らわした。

くそつ、何で俺が何回も霊奈に叩かれなければならないんだ？

「あのなあ、何で……………」

俺は霊奈に文句を言おうとしたが、霊奈の不思議そうな顔つきに言葉を繋げることができなかった。

「……………」  
霊奈は俺の顔を凝視しながら呆然と立ち尽くしていた。一体どうしたのかと思っていたら、今度は、両手で俺の頬をピシヤピシヤと軽くはたいた。

「えっ？ えっ！ ど、どうして？」

何なんだ、一体？

「あ、あんた……。霊魂じゃなかったの？」

「いや、霊奈がそう言うから、そのつもりだったけど、……違うのか？」

「あんた、私がぶん殴ることができないじゃない。叩くことができるじゃない」

俺もやつと気がついた。霊奈は今、肉体と一体化している。俺が霊魂なら話すことはできても、殴るところか触れることもできないはずだ。

「そんな馬鹿な……。トランスポイントは肉体を持ったままだと通過できないはず。だからあんたは霊魂だったはずよ。それなのに……」

「……」  
そうだ。霊奈が自分の肉体と一体化した後、俺は霊奈に触れることはできなかった。その後、あの黒ローブの男が襲って来て……………

あれ？ そう言えば、その黒ローブの男は？

「霊奈。それよりあいつは？」

「……」  
そうだ。こんなことをしているうちに大鎌を持って近くに迫っているかもしれない。

霊奈も思い出したようで、霊奈とともに用心深く辺りを見渡してみたら人影は見えなかった。黒ローブの男が立っていたと思われる場所まで行ってみると、黒いローブが地面に落ちていたが、その中身はどこにもいなかった。

「逃げたのかな？」

俺は霊奈に訊いてみたが、霊奈も見当が付きかねているようだった。

「さあ、……そうかもね」

霊奈は、俺から顔を背けながら、黒いローブを指さして言った。

「と、とにかくそれでも羽織りなさいよ。見苦しいたらありゃしない」

何だよ。貧弱の次は見苦しいかよ。まあ、ギリシャ彫刻のような洗練された肉体美とはいえないだろうが……。

もつとも俺も露出狂の趣味は無いので、とりあえず黒ローブを羽織った。他人が着ていたものを素肌に直に着るのは若干抵抗があったが、変な臭いはしなかった。

俺が服を着て、霊奈も少し冷静になったのか、腕組みをしながら考え込んでいた。

「あんたはトランスポイントを通過した時点では確かに靈魂だった。獄界に来てから黒ローブの男に襲われた。それから、……あの衝撃」

霊奈は俺の顔を見ながら話を続けた。

「これは一つの仮説だけれども、……黒ローブの男が落雷の直撃を受けて即死した。あんたはその一瞬の隙に黒ローブの男の肉体を乗っ取ってしまったのかも……。うん、この状況はそう考えざるを得ないわ」

「ちよ、ちよつと待て！」

俺は辺りをきよろきよろと見渡して、鏡のように俺の姿を映してくれるものを探したが見当たらなかった。しかし、月が川面に写っているのに気づき、水際まで歩いて行った。一瞬、中学校の時に川に落ちた時のことが脳裏をよぎって不安感に駆られたが、ゆっくりと上半身を川面に写してみた。

月と星の明かりで川面に写っていたのは、……間違いはない。

俺だ。俺の顔だ。

それからちよつと黒ローブをはだけて体も確認してみたが、俺の

体に間違いなかった。

俺は振り返って再び霊奈の側に近づいて行った。

「俺は俺だ。顔も体は何も変わっていないぞ」

「あんたは浄化されていない靈魂だったんだから、黒ローブの男の体を自分の記憶している容姿に変えたのかもしれないわね」

まったく分からない。「浄化されていない靈魂」って何だ？ 俺は整形外科の医者でもないのに、黒ローブの男の体を自分の姿形に変えたって言うのか？

「すまん、霊奈。俺は霊奈の言っていることがまったく理解できないんだが」

「当たり前よ。あんたは地界から来たんだから」

「いや、そういう意味じゃなくて、説明してほしいんだけど。『浄化されていない靈魂』って何だ？」

「そうね。……あんたはもう地獄に行く必要はなくなったはずだけど、私も至急、上に報告をしなければならぬし、実際、あんたを連れて行って説明をした方が話が早いと思うから、あんたも一緒に地獄に来て」

「靈魂じゃなくなっても地獄に行つて良いのか？」

「別に地獄は秘密の場所じゃなくて、見学者用のコースも完備されているくらいだから」

「そ、そうなのか」

獄界の修学旅行なんかでは必ず見学コースに入っているんだろうか？

「『浄化されていない靈魂』の説明は……」

「地獄に行く間にしてあげるわよ。あつ、それから、……さっきはありがとう」

ちよつとはにかんだ霊奈に何故か胸がときめいてしまった。

こいつも可愛いところがあるじゃねえか。最初からそういう態度でいてくれたら俺は尻尾を振ってついて来たのに。

でも、俺、お礼を言われることをしたかな？ 思い当たるこ



とといえ、黒ローブの男に向かって行ったことくらいだが……。  
しかし俺が助けたわけじゃないし……。

「結局、俺は何もしていないって……」

「ううん。……とにかく行こうか」

そう言つと霊奈は、最初に行こうとしていた堤防の上に行く道を先に歩き出した。俺も霊奈の後に続いて堤防の上まで行くと、そこには一台の白いスクーターが停めてあつた。俺が乗っていた原付スクーターよりも大きい。一二五ccくらいの大きさだな。しかし、先進的なスタイルだなあ、タイヤが無いなんて……。

いや、タイヤが無ければスクーターじゃないだろ！ 何なんだ、この乗り物は。

霊奈はそのスクーターもどきの乗り物に近づくと、右手をハンドルの中央付近にかざした。すると、モーターが回るような音が微妙に聞こえてきた。

「これは？」

「私達ソウルハンター専用の乗り物よ。『エア・スクーター』っていうの」

「エア・スクーターっていうことは、ひよつとして空を飛べるとか？」

「そうよ。この後部座席の下には靈魂を固定することができる靈魂シートベルトが装備されていて、回収した靈魂をこれで地獄まで運ぶのよ」

「俺はもう靈魂じゃないみたいだが、乗れるのか？」

「まあ、普通に二人乗りもできるから」

霊奈が運転席に足を揃えて座ると、俺は後部座席に跨った。

「それじゃ、ちゃんと掴まってよ」

そう言い終わるまでに、エア・スクーターは助走をすることもなく、夜空に向かって急上昇した。俺は後ろにひっくり返りそうになつて、思わず霊奈のお腹に両手を回してしがみついた。

「ちよつと、どこ触っているのよ!」

霊奈の奴、上半身だけ振り返って、本気モードの鉄拳を俺の脳天に食らわしてくれやがった。今日、何発目だ？

「掴むところが無いんだよ！」

「後ろにあるでしょ！」

よく見ると後部座席の後ろにバーがあった。俺は両手を後ろに回してバーを掴んだが、吹っ飛ばされそうになることは変わらなかった。飛ばしすぎだ、霊奈。俺はヘルメットも被っていないし、パラシュートだって背負っていないんだぞ！

しばらくするとエア・スクーターは水平飛行になった。飛行機から見たことのある風景が直に俺の眼下に広がっていた。そんな上空を飛行しているのに息苦しくないし、去りゆく風景からして、エア・スクーターは結構な速度を出しているみたいだが、風圧はほとんど感じなかった。

「もう少しで地獄に着くけど、その間に、さっき、あんたが訊いてきた質問に答えあげてあげるわ」

「『浄化されていない靈魂』ってことか？」

「そうよ。……確か、肉体を失った靈魂は徐々に記憶を遡らせて若返っていくってことは話したわよね？」

「ああ」

「生体機能を停止した肉体から離脱したばかりの靈魂は生前の記憶を持つているけど、時間の経過とともにその人生を逆回転させるみたいに次第にその記憶を失っていくの。そして最終的に全ての記憶を失った靈魂を『浄化された靈魂』と言うのよ。すべての靈魂は地獄に送られて、そこで浄化されるまで過ごすのよ」

「地獄では『気持ちいいこと』をしてくれるって言うってたけど……？」

地獄に行くことはなくなっただけど、やっぱり気になるじゃないか。地獄では靈魂に安楽と快感を与えて効率的に浄化をするようにしているのよ。一般的に靈魂が浄化されるまで、その靈魂が肉体を有して生きた年数を要するの」

「つまり長生きした人の霊魂ほど浄化されるまで長く掛かるということなのか？」

「そういうこと。地獄に収容された霊魂は、生前に生きた年数の約半分からい的年数で浄化ができるようになっていいるわ」

「浄化された霊魂はどうなるんだ？」

「浄化されて記憶を失った霊魂は地獄から解放されて、獄界や地界で新生児に宿ることになるの」

「生まれ変わるといことか？」

「そういうことね。前の記憶を持ったままの霊魂が新生児に宿ったら変でしょう」

それもそうだな。生まれただかりの赤ん坊がエロゲやアニメの話延々としだしたら、ちよつと引くよな。

「そのようなことがないように、私達ソウルハンターが霊魂を回収して地獄に送って、前世の記憶が無くなるまで隔離をしておくということなの。あつ、そろそろ着くわよ。続きは後で」

十分くらいのフライトで遠くに富士山が見えてきた。獄界とこの世界は地界とどこまでも似ている世界だ。しかし、その富士山の麓には見渡す限りの森が広がっていた。その森のど真ん中に一際高い塔が立っていた。まるで富士山と高さを競うように立つ塔は、繋ぎ目の無い黒一色の壁で、上部に行くに従って若干細くなっている円柱だった。森の中にはその塔以外にはそれほど高い建物はなく、樹海のような森の中にいくつかの建物が点在していた。

また、よく見ると森は高い屏で囲まれているようだ。見ようによつてはめちやくちや広い刑務所つて感じた。

霊奈は一番手前に見えていた建物に降下して行った。左右に二つの重厚な塔を持ち、その間には大きな鉄扉が高くそびえている。：「どうやらこの施設の正門のようだ。門の上部には「ようこそ地獄へ」という安っぽい看板が掛けられていた。まるで流行っていない遊園地の入り口みたいだ。

霊奈が鉄扉の鍵穴のような部分に右手をかざすと、重そうな音を

響かせて大きな鉄扉は左右に開いた。

霊奈と俺はスクーターに乗ったまま門を通過し、「見学コース」と矢印を模した看板が指している方向に、地面を走るほどの高度でゆっくりと走って行った。

「この壁に囲まれた森が地獄なのか？」

「そうよ。死んで肉体を失った靈魂は世界中から、つまり獄界と地界の両方から、ここに集められてくるの」

「獄界の靈魂はどうやって集めるんだ？」

「基本的に同じよ。トランスポイントを通過する手間が無いだけ」

「ふ〜ん。それでここにはどれだけの靈魂が収容されているんだ？」

「正確な数字は忘れちゃったけど、二百億はいたはずよ」

「二百億！ 確か世界の人口は七十億くらいだったと思うんだが…」

…

「地界だけでしょ。獄界も同じくらいの人口がいるわ」

「そうすると地界と獄界を併せても百四十億人だぞ。この地獄にいる靈魂が順番に生まれ変わるとしても残りの六十億は余剰人員ってことになるのか？」

「まあ、そう言うことね。でも浄化が済んで地獄から解放されて、新しく宿るべき肉体を探しながら地界と獄界を彷徨っている靈魂も合わせると千億くらいはいるはずよ」

「千億！ そ、そんなに余裕があるんなら、わざわざ地獄で浄化期間を短縮する必要は無いんじゃないか？」

「でも靈魂は減ることもないけど増えることはないから、獄界と地界の人口政策的にはちゃんと管理をしておく必要があるのよ」

「すると靈魂の数というのは不変ということか？」

「そうよ」

「どうして？」

「分からないわ。今でも靈魂科学分野での大きな謎の一つなのよ。でも、そんな大事な靈魂だからちゃんと管理をしなければいけないの」

「そうか。……ところで、地獄から出て、漂っている靈魂はいつの段階で肉体に宿るんだ？」

「赤ん坊が母親のお腹から出てきた瞬間に一番乗りの靈魂だけがその肉体に宿ることができるの」

「靈魂が宿ることなく赤ん坊が生まれるってことはないのか？」

「さつきも言ったように競争率が激しいからね。そんなことは起り得ないわ」

確かに千億分の一の確率で靈魂は新たな肉体を得ているわけだ。それだけの競争に競り勝って肉体を得た靈魂なんだから、みんなたくましく生きられるはずだよな。

エア・スクーターは森の中の一本道をゆっくり進んでいた。時々、野鳥の鳴き声も聞こえてきて、確かに心洗われるような気がする場所ではある。

そう言えば、……閻魔大王じゃない「エンマ」の所に行くつて、靈奈は言っていたよな。人の死亡予定が書き込まれたペーパーを出すって奴だ。この地獄の支配者なんだろうか？

「なあ、靈奈。エンマってどこにいるんだ？」

「あれよ」

靈奈が指さした先には、地上からでもはつきりと見える黒く高い塔があった。

「あの中にいるのか？」

「あの中っていうより、あれがエンマよ」

「あれがエンマ？」

「そうよ。すべての靈魂、すなわち、現在、肉体を有している靈魂も、肉体を有していない靈魂も、獄界と地界のすべての靈魂の管理をしている巨大コンピュータよ」

「コンピュータ！ エンマって人じゃなかったのか？」

「誰が人だなんて言った？ あの黒い塔全部がエンマの本体なのよ」  
「ただだけ巨大なコンピュータなんだ。でも千億の靈魂を管理しているんだから、あれだけのがたいがあっても不思議ではないな。」

「でも、人の死亡を予測するって、どうやってするんだ？」

「靈魂は靈エネルギーによって活動しているんだけど、エンマは靈エネルギーによって発せられる特殊なパルスをキャッチして人の死亡を予想しているらしいわよ。私もエンマのエンジニアじゃないから詳しい事は分からないけどね」

「その死亡予想は確実なのか？」

「ええ、ほぼ百パーセントの確率よ。死亡する一日前にエンマから死亡予定レポートが出力されるから、その予想に従って、私達ソウルハンターが靈魂の回収に行っているわけ」

まさか人の死亡がコンピュータによって予想できていたなんて思いも寄らなかった。もっとも予想されるのが死亡の一日前ということだから、生命保険会社は獄界でも商売できているはずだよな。

靈奈は深い森の手前にある野鳥の観察場所のような木製のテラスの前でスクーターを停めた。

そこには景色の良い観光地にはどこにでもあるコインを入れて見る望遠鏡のようなものが設置されていた。

「ソウルハンターは訓練によって裸眼の構造を組み替えて靈魂を見ることができけど、一般の人は特殊なフィルターを通してじゃないと見ることはできないのよ。これがそのフィルター付きの望遠鏡よ」

靈奈がコインを一枚、望遠鏡に入れると俺に接眼部を向けた。

俺はその望遠鏡に目を当てて森の方を見てみた。

暗い森の中では裸眼では見えなかった沢山の老若男女がたむろしていた。地獄ライフをエンジョイしているんだらうか？ みんな笑顔だった。

「色んな年代の靈魂が見えると思うけど、若い姿をしている靈魂ほど浄化が進んでいるということね」

「そうすると、赤ん坊の姿の靈魂は浄化済みってことか？」

「浄化がほぼ終わっていると行って良いわね。浄化が終わった靈魂は人の形も忘れて、単なる光の玉のようになるわ」

そういえば火の玉のようなものもいくつか漂っている。怪奇現象特番によく出演している火の玉は本当に霊魂だったんだ。

「浄化が終わった霊魂は地獄から解放されて、その一部はランダムに地界にも送っているわよ」

「それじゃあ、今、通ってきた町中にも、この火の玉がいっぱい浮かんでいたってことか？」

「そうよ。新たに宿るべき肉体を探しながらね。……それじゃ次に行ってみましょう」

俺は再び霊奈の運転するスクーターに乗って地獄の敷地内を低空で走って行った。

森を抜けると、そこには湯気が立ち上る広大な露天温泉があった。温泉は鉄分が多いのか、やや黒づんだ赤色をしていた。まるで血の池地獄だ。

ここでも見学者用の望遠鏡が設置されていた。風呂場を望遠鏡で覗くのはちよつと犯罪の臭いがするが……。しかし温泉に浸かっている霊魂達は皆気持ち良さそうだった。

「あの温泉には霊魂でも温感が感知できる特殊な薬剤が混入されているの。霊魂をリラックサさせることで、より浄化を速めることができるのよ。ぐだぐだと考えているよりさっぱりした方が速く忘れることができるでしょ」

それは理解できる。テストが終わった後、家でエロゲに熱中している時には、そのテストのことなんて記憶の片隅にすら残っていないからな。

次に俺達は温泉の隣に建つ病院のような白く巨大な建物に入って行った。建物の中には向こう側の壁が見えないくらいに大きな部屋があり、そこには無数のベッドが並んでいた。入口付近に備付の望遠鏡を覗くと無人に見えたベッドの上には霊魂達が横たわっていた。「あのベッドには特殊な微電流が流れていて、やっぱり霊魂にリラクゼーションを与えているの。まるで針治療を受けている感じかな」

針地獄ってところか。……って地獄じゃないだろう。霊奈が

言っていたとおり、俺の想像していた地獄とは全然違う。大規模なリハビリセンターって感じた。

そして、さつきから俺は気になっていることがあった。施設の中にゴーグルのような物を目に掛けた若い女の子が大勢いたことだ。しかもみんな虎柄のビキニのような服を着ている。

正直に言う俺は望遠鏡で靈魂達よりその女の子達の方を重点的に見ていたんだが、いったいこの女の子達は何をしているんだろうか？ これは靈奈に訊くしかないだろう。

「あれは監視員よ。もっともみんな派遣やバイトだけだね。本当は靈魂ともコミュニケーションが取れるソウルハンターが全部の監視をすれば良いんだけど、ソウルハンターの絶対数は不足しているし、人件費削減のためには正職員だけじゃできないのよ。ちなみにあのゴーグルはこの望遠鏡と同じようにソウルハンターじゃなくても靈魂が見られるものよ」

「靈魂は見えるけど話はできないんじゃないのか？」

「そうね。だから異常事態があれば、本部に常勤しているソウルハンターに連絡をして来てもらうようになってるのよ」

地界でも最近では事業仕分けとかあったけど、地獄にも経費削減の嵐が吹き荒れているようだ。でも経費削減ってことは、この地獄もどこかが経営しているってことだよな。

「なあ、靈奈。地獄はどこが経営しているんだ？」

「もちろん国営よ。エンマの管理と一緒に地獄の経営も靈魂管理庁の所管業務よ」

「税金で運営しているってことか？」

「そういうこと。地界から税金を取ることはできないからその分は持ち出しになるけど、獄界では死んだ人の遺族から『地獄利用税』を徴収しているの。だけど税金の使い道については最近はめつきりうるさくなってきたからね」

「例えば、地獄なんて税金の無駄遣いだとか？」

「地獄業務は絶対必要だって事はみんな理解しているから、地獄が



無くなることはないわね。でもね、地獄の業務を官から民にという動きはあるの。民営化すれば何でも効率的に行えると思っっているみたいね」

「地獄業務を民営化したってあまり利益を生むとは思えないけどな」「それはそうよ。でも民営にして『地獄利用税』を『地獄利用料金』にすれば、もっと安くすることができるって思っっているみたいね」

「そんなに言うんなら、いつそのこと一度民間に任せてみれば？」「地獄の管理だけならそれほど問題は無いんだろうけど、地獄の管理はエンマの管理と切り離すことはできないの。エンマの管理を民間が握ったらどうなると思う？」「

「何か変わるところがあるかな？」

「エンマは獄界と地界の全人類の死亡予測がほぼ百パーセント確実に行えるのよ。そして、その機能を発展的に利用することで、全人類の生殺与奪を握ることができるとも可能よ。神と同じ力を特定の一部の者が手にすることができるのよ。新たな権力者がこれを悪用しないってことは言い切れないでしょ」

「でも、今も特定の国家公務員が管理しているわけだろう。それが民間になるだけの話じゃないのか？」

「これまでの政府は、ずっとエンマを特定の個人によって管理させないようにしてきたの。そしてエンマと同じものを作る事もできないようにもね」

「どういう風にして？」

「エンマのすべての仕組み、つまりプログラムは分割管理されていて、誰一人としてその全体としての仕組みは知らないし、知る事もできないの」

「そのプログラムの分割管理をしているのは誰なんだ？」

「エンマを作った科学者達の末裔である私達よ」

「末裔？」

「そうよ。エンマは、その昔、獄界を統一した大王が科学者達に命じて作らせたものなの。でも、そのエンマを作った科学者達が中心

となつて反乱が起き、大王の治世が終わつた後、獄界はその科学者の子孫達が集団統治する統一国家となつたの。それ以来、獄界ではずっと一つの国なの」

なるほど。獄界には外国という概念が無いと言つたのはそういうことか。

「それで、その科学者達がエンマを作つたのはいつ頃なんだ？」

「二千年以上前よ」

「に、二千年前！」

「エンマを作つた十三人の科学者達は、エンマが特定の個人や勢力に利用されないようにするため、エンマのプログラムのバックアップを十三等分して、それぞれの子孫に引き継がれるようにしたの。そして十三人の科学者の子孫達は、それぞれ政治集団を作り、時には協力しながら、時には争いながら、牽制しあつて、独裁政権ができることを防いできたの」

「二千年間、ずっと？」

「そうよ。二百年くらい前からは、この国も民主主義体制になつたけど、十三の政治集団が大合併をして『神聖自由党』という政党を結成して、現在までずっと政権与党の座を守っているわけ」

「その神聖自由党の党員はみんな、その十三人の科学者の末裔ということなのか？」

「いいえ。民主主義になつてからは誰でも政治に参加できるわけだから、今の神聖自由党の党員はみんな末裔とは限らないわよ」

「でも霊奈はその末裔の一人だということか？」

「ええ」

「神聖自由党の党員でもあるのか？」

「私の父親は神聖自由党の党員だけど、私はまだ入党していないわ。まあ、いずれは入ることになると思うけど」

「霊奈はソウルハンターだって言つただろう。ソウルハンターとその政党は何か関係はあるのか？」

「特に関係は無いわよ。ソウルハンターというのは認定試験を通つ

た者だけが名乗れる資格のことなの。靈魂管理庁に常勤している国家公務員のソウルハンターもいるし、私みたいに靈魂回収を囑託として請け負って報酬を得ているフリーのソウルハンターもいるの。でもいずれにしても職業の一つで政治とは直接の関係は無いわ」

見た目、靈奈は俺と同じくらいの年齢のように見えるけど、もう仕事をしているんだから本当は俺よりも年上なんだろうか？

本当は靈奈「さん」って呼ばなきゃいけなかったのかも……。でも今更だよな。

「あつ、もうこんな時間だわ。あんたのことを靈魂管理庁の上役に報告しなければならぬからついて来て」

腕時計を確認した靈奈は病院のような建物から外に出た。俺も靈奈について行き、再びエア・スクーターの後部座席に乗った。

スクーターは富士山の麓に一番近い場所に建つ西洋の城のような建物の前まで低空で飛んで行った。どうやらこの建物が地獄の本部棟のようだ。入り口には「靈魂管理庁」と書かれた看板が掛かってた。

靈奈は俺をつれて「搜索課」という看板の掛かった事務室に入っていくと、部屋の一番奥に置かれた立派な執務机に向かって座っている人物の前に立った。執務机には「搜索課長」という机上札が置かれていた。

靈奈は搜索課長に事の顛末を報告した。搜索課長は見るからに黒人なのだが背広の胸に付けた名札には「小浜おはま」とあった。小浜課長は更に上に報告することを告げて、靈奈には本日はもう帰宅して良いと告げた。

俺と靈奈は搜索課の部屋を出て建物の玄関に向かって歩き出した。「それで俺の事を上司に報告して、この後はどうなるんだ？」

「とりあえず、あんたが地獄に行く必要はなくなったということは確かな事実として確認できたから、エンマにおけるあんたの属性データを修正する必要があるということ。靈魂管理庁のエンマの管理部門に連絡をしたの」

「俺の属性データ？」

「あんたは地界から来た靈魂だったのよ。それが獄界で肉体を得て生き続けることになったから、獄界でのあんたの寿命予想をエンマが漏れなく行うためには、あんたのデータを現状に合致させる必要があるということよ」

「ふうん。それは誰がやるんだ？」

「さっきあんたを検査した時にエンマ自身が実行済みよ。ただしそれは飽くまで仮データだから、靈魂管理庁の複数の管理職の決裁を得た上、本データに変更する許可をエンマに与えることになるわね」  
「けっこう面倒なんだな」

「エンマの機能を特定の人間が恣意的に運用することを防ぐためには仕方が無いのよ。エンマが一度下した予想が勝手に書き換えられるようにしなければならぬからね」

俺と靈奈は靈魂管理庁地獄分庁舎の玄関前に停めていた靈奈のエア・スクーターの所にやって来た。

「地獄の見学も以上よ。さて……………、あんた、これからどうする？」

地獄に行かなくても良くなったということは……………、んっ……………  
待てよ。俺は借り物とはいえ肉体を得たんだから……………死んでないということだよな。

「あの〜、靈奈」

「何？」

「…………俺って生き返ったということだよな」

「そういうことになるわね」

「だったらさ、元の世界に戻してくれないかな」

「はあ〜、あんた、やっぱり馬鹿なのね」

靈奈は呆れた様子で俺の顔を睨んだ。

「な、何だよ。確かに勉強は苦手だが、今日、初めて会った女の子にそんなに何回も馬鹿呼びわりされる筋合いは無いぞ！」

「何回言っても憶えられないあんたのことを『馬鹿』以外の的確に

言い表す言葉を知らないわ。あのねえ、さつきも言ったでしょう。肉体を有したままトランスポイントを通過することはできないって。元の世界に戻るには、また霊魂だけになって行くしかないわよ」「……………ということは、また、こっちでも死ななきゃ駄目ということか？」

「私達ソウルハンターのように訓練を積みめば、幽体離脱をして元の世界に戻ることが出来るわよ。でも霊魂になって元の世界に戻ったって、さつきと同じように向こうの世界の誰とも話すことも接することもできないのよ」

「そうか……………」

どうやら獄界で生き返ってしまった俺は獄界でしか生きられないようだ。

「それじゃあ、俺はこれからどうしたら良いんだ？」

誰も知り合いもおらず、帰るべき家も無い世界にいきなり放り込まれた俺は途方に暮れてしまうしかないだろう。このままホームレス生活を送るしかないのか？

「そうねえ……………。仕方が無いわね。それじゃあ、とりあえず私の家に来る？」

「えっ、霊奈の家に……………。ひよつとして一人暮らし？」

主人公が一人暮らししている家に空から美少女が落下してくるっていうお決まりのパターンがあるくらいだから、その逆もあって良いよな？

「私に一人暮らしをしてほしいの？……………どういう設定でどういう期待をしているのかしら？」

「べ、別にちよつと確認してみただけだよ」

「とにかく、あんたを獄界に連れて来たのは私だし……………。お父様に事情を話せば、二・三日は置いていただけのわよ」

「二・三日だけかよ」

「その間にあんたが住める家を探してあげるわ。それじゃ行きましよ」

俺は霊奈が運転するエア・スクーターの後部座席から振り落とされないように苦勞しながら、富士山山麓から、俺の知っている地図では東京方面に向かつて飛んで行った。

遠くに都会の夜景が見えてきた頃、俺はエア・スクーターの後ろの席から霊奈に話し掛けた。風圧がほとんどなく風を切る音もしなかったから、声を張り上げなくても話はできた。

「なあ、霊奈」

「何？」

「霊奈のお父さんって、さっき政黨員って言ってたけど議員さんなのか？」

「そうよ。お父様は神聖自由党の副幹事長をしている国会議員よ」  
国会議員で政党の副幹事長！ 新聞くらいはたまに読む俺も政党の副幹事長が偉い人だってことは分かる。しかも政権与党の副幹事長といえはすくなくない？

霊奈って意外とお嬢様なんだな。自分の父親を「お父様」って呼んでいたし……。俺、どんな大豪邸に連れて行かれるんだろう？ 逆「玉の輿」ルートのフラグが立ったのかも……。

### 第三章 三姉妹

満天の星で明るい夜空を、都心からちよつと離れた郊外の住宅街に霊奈の運転するエア・スクーターは飛んで行った。そこは一見して高級住宅街と分かるほど家々の敷地は広く区画されていた。エア・スクーターはその中心部付近にある一軒の家の前に降り立った。

やっぱり有力政治家の家だ。お城のような超豪邸……でもない。高級住宅街に行けばごろごろある程度の古ぼけた和風の家だ。まあ、地界の俺の家よりは相当でかいけどな。

家の前には小さな庭と車が二台ほど置けるポーチだけの車庫があったが、車庫には車は停まっていなかった。その車庫の隅っこにエア・スクーターを置いた霊奈の後ろについて玄関に向かった。玄関は曇りガラスがはめ込まれた木製の引き戸で、鍵穴のような部分に霊

奈が手をかざすとロックが解除されたような音がして、左側の引き戸が自動で右にスライドして開いた。

霊奈が先に玄関に入って俺の方に振り向いた。

「どうぞ」

俺は霊奈に続いて玄関に身体を滑り込ませるようにして中に入った。

「お邪魔します」

家の中は掃除が行き届いているようで、お香のような良い香りも漂っていた。

「ただいま」

霊奈が玄関から伸びている廊下の奥に向かって声を掛けると

「お帰りなさい」

と家の奥から女性の声がした。

廊下の奥にあるドアを開けて出て来たのは………等身大の日本人形だった。

というのは嘘だが、そう見間違ってもおかしくないほど若く美しい女性だった。

シャンプーのコマーシャルへの出演依頼が殺到してきてもおかしくないくらいに綺麗な漆黒の髪は、前は目の上で切り揃えており、後ろは背中の中程で白い紙のような髪留めで一旦まとめられており、その下は腰辺りまで伸びていた。

切れ長の目に黒く輝く瞳、すらっと通った鼻筋に口は小さくまとまっており、やや病的なほどに色白な肌で、暗闇でいきなり会ったら幽霊と勘違いしてしまいそうだ。そして、目が奪われるほどの美人なのは違いないが、その清楚な雰囲気からは少女のような可愛らしさも感じられた。

女性は霊奈と同じくらいの身長だったが、薄緑色の着物の上に、お婆ちゃんが着ているような割烹着を着ており、それがまた可愛く見えた。

「あら、霊奈。お友達？」

話す言葉も穏やかで平安貴族の姫君のような口振りだった。

もっとも平安貴族の姫君と話をしたことはないけどね。

「違うわよ。まあ話せば長くなるから、お父様が帰られたら一緒に事情を説明するわ」

霊奈は俺の方を向いて、その女性を紹介してくれた。

「姉の幽奈ゆうなよ。うちは母親が早く死んでしまったんで母親代わりにずっと家事をしてもらっているの」

「あ、あの、初めまして。永久真生と言います」

俺は玄関で立ったままお辞儀をした。

幽奈と呼ばれた女性は無駄なく優雅な動きで玄関で正座をして三指をついた。

「御上幽奈と申します。よろしくお願いいたします」

幽奈さんは高級旅館の女将さんのようにお辞儀をした。俺は恐縮してしまって、腰を九十度に曲げて最敬礼のお辞儀をした。

幽奈さんは顔を上げると俺の顔をマジマジと見ながら微笑んだ。

「やっぱりすげえ美人だ。」

「真生さんとお呼びしてよろしいかしら？」

「はい、どうぞ」

「でも変わった名前なんですわ。初めて聞きました」

「そ、そうですか？俺も幽奈さんのような綺麗な人は初めて見ました。はははは　ぐわっ！」

俺が思い切り照れていたら、何故だか霊奈の肘鉄が俺の脇腹を直撃した。

「幽奈に変な事したら承知しないからね！」

不意打ちとは汚いぞ、霊奈！　くそっ！　せっかく生き返ったのにまた殺す気か？

「……まだ何もしていないだろうが！」

「まだ？」

「あっ、いや、……これからもずっと」

「盛りの付いた犬みたいな若い男を家に入れるのは危険だわ。幽奈



も気を付けて」

「俺は犬じゃねえし、盛りも付いてない！」

「まあまあ。私は真生さんを信頼していますよ。そんなひどいことをする人ではないと目を見れば分かります」

幽奈さんは 何となく自分より年上のようなうだし、その所作からも「さん」付けじゃないと申し訳ないような気がする 男を見る目をお持ちのようだ。それに比べて人にいきなり肘鉄を食らわすお前は……！ ……って、霊奈の奴、俺の怒りの眼差しもスルーかよ。

「でも、真生さん。変わったお召し物ですね」

そういえば、黒ローブの男のローブを着たままだった。霊奈もすっかりと忘れていたようだ。

「あっ、真生は行き倒れみたいなもの、その服しかなかったのよ」

おい、霊奈！ 何か微妙に脚色されているぞ！ ……って、やっぱり俺の怒りの眼差しは無視かよ！

「それより幽奈。お父様は何時頃帰って来られるのかな？」

「秘書の方から二十分ほど前に党本部を出たと連絡があったから、もうそろそろ着く頃じゃないかしら」

「そうか。それじゃあ、真生。私はちよつと着替えてくるから、お父様が帰って来るまで応接間でくつろいでテレビでも見せて」

霊奈はそう言うと、靴を脱いで玄関に上がった後、脱いだ靴をきちんと揃えてから、玄関のすぐ近くにある階段を昇って行った。

霊奈は、その暴力的言動からは信じられないが、躰はきちんとされているようだ。

一方、躰の権化としか見えない幽奈さんは優雅に微笑みながら立ち上がり、俺を階段と反対側にある部屋に招き入れてくれた。ここは応接間のようで、アンティークな家具とソファが和風モダンの雰囲気醸し出していた。

「それではこちらでお待ち下さい。今、お茶をお持ちしますね」

「あっ、あの、お構いなく」

「退屈でしょうからテレビでも付けましようか？」

俺の返事を待つことなく、幽奈さんはリモコンでテレビの電源を入れた後、お辞儀をして応接間を出て行った。

テレビでは地界と同じようなバラエティ番組をしていた。……つくづく獄界は地界の並列世界なんだと実感させられる。地界と違うと感じるところは、時々、未来的な機械があること、そして地球が一つの国として人種が固定されていないことくらいだ。

テレビでは、白人と黒人のお笑いコンビがコテコテの関西漫才をしていた。……けっこう面白いかも。

漫才が終わると馬鹿でかい蝶ネクタイを締めた司会者が出てきた。「それではお待ちせしました。本日のゲスト、人気急上昇中のあやなちゃんに歌ってもらいましょう。曲は『恋のデコピン』。では、どうぞ〜」

へえ〜、やっぱり獄界にもアイドルがいるんだ。確かに今テレビに出ている女の子はちょっと幼い感じだけどけっこう可愛いな。アニメヒロインのコスプレばい容姿だし、声もアニメ声だ。好きな奴にはたまらんだろうな。俺？ ……もちろん好きさ。友達に言わせると俺は女性に対して見境がないそうだ。確かにこんな女の子じやなきや駄目だというこだわりは無い。幽奈さんのような和風美人も素敵だし、このアイドルの女の子も可愛いと思う。霊奈も……まあ可愛い部類に入るだろうな。

「ただいま〜」

また女の子の声がして玄関の扉が閉まる音がした。

「幽奈〜。お腹空いた〜。応接間にいるの？」

そう言いながら女の子が一人応接間に入って来た。ミニスカートのセーラー服を着て、黒のニーハイソックスを履いていた。身長は幽奈さんや霊奈よりも相当低い。まだ中学生って感じた。

しかし、ぶっ飛んでいる娘だ。大きな黄色のリボンでツインテールにしている長い髪はピンク色だし、瞳は赤い。カラーコンタクトでも入れているのか？

あれ、でも、……どこかで見たことがある顔だな？ 獄界に  
来て初めて会うはずなのに……。

「あなた、だ〜れ？」

女の子は首を傾げながら俺に訊いた。

「あの、俺は……」

「あら、帰って来てたの」

幽奈さんが丁度、お茶を持って応接間に入って来た。

「ただいま、幽奈。それより変なコスプレしている人がいるんだ  
け」

黒いローブを羽織っていたら、そう思われても仕方が無いよな〜。

「その方はお客様よ。永久真生さんっていうの」

「ぶ〜ん、そうなんだ。……なになに、幽奈か霊奈の恋人？」

「違います。霊奈のお知り合いみたいよ。それよりちゃんとご挨拶  
しなさい」

「は〜い。初めまして〜。三女の御上<sup>みかみ</sup>妖奈<sup>あやな</sup>です」

妖奈と呼ばれた女の子はちょこんと頭を下げた。

妖奈……。どこかで聞いたような……。

そんな俺の後ろでつきっぱなしだったテレビから歓声とともに図  
太い声が聞こえてきた。

「あやな〜！ あやな〜！」

俺が後ろを振り返ってテレビの画面を見ると、揃いの鉢巻きをし  
て法被を羽織ったアイドルの親衛隊のような男達がいわゆるオタ芸  
という踊りを踊りながら、ステージ衣装らしきフリフリのミニスカ  
ートを揺らしながら歌い踊っている女の子に声援を送っていた。そ  
の女の子は……今、目の前にいる女の子じゃないか！ 俺はテレビ  
の中にいる女の子と目の前にいる女の子を交互に見比べてしまった。  
「あつ、これ録画だから。えへへ」

目の前にいる女の子は可愛く俺にウィンクした。

しかし、何という三姉妹なんだ。長女は家庭的な和風美人、  
次女は剣を振り回す金髪のソウルハンター、三女はぶっ飛んでるア

アイドル。……今日は色々起こりすぎだ。もう俺の想定範囲を超えている。これで、実は四女もいて宇宙人だって言われても全然驚かないぞ。

そこに着替えを済ませた霊奈が応接間に入って来た。Tシャツにジーンズという普段着の霊奈を見ると、あの黒ローブの男と戦った霊奈と同一人とは思えない、普通の女の子だった。

「あれ、妖奈、帰って来てたんだ」

「私がいるとお邪魔だった？」

妖奈と呼ばれた女の子は俺と霊奈を交互に見ながら、にやにやと笑っていた。

「な、何を言っているのよ。こいつはちょっと訳があって家に来ているの」

その時、丁度、車庫に車が入ってくる音がした。

「お父様だ」

嬉しそうに妖奈ちゃん どう見ても俺より年下だし呼び捨てよりは「ちゃん」付けがぴったりきそうだが言った。

「真生。ここでちょっと待ってて」

霊奈はそう言つと幽奈さんと妖奈ちゃんと一緒に応接間を出て行った。

玄関の扉が閉まる音がしたが、この家の主はなかなか応接間に入つて来なかった。玄関で霊奈が俺の事を親父さんに説明しているんだろう。

俺が応接間で立って、この家の主が入って来るのを待っているとしばらくしてから三姉妹の後から羽織袴を着た長身の男性が入って来た。

白髪の髪をオールバックにして、やや浅黒い顔には立派な口髭と顎髭を蓄えていた。教科書で見たことがある明治時代の代議士を彷彿させる容姿だ。

男性は黙って応接間の一番奥にある一人掛けのソファに座ると俺に声を掛けてきた。

「座りたまえ」

さすが政権与党の副幹事長だ。容姿だけでも相当な威圧感の持ち主なのに、低いがよく通る声も貫禄十分だ。俺は会釈をして対面の一人掛けのソファに腰掛けた。その両側にある二人掛けのソファに分かれて三姉妹が座った。

「この家の主、御上龍岳だ」

「初めまして。永久真生といます」

「靈奈から若干は話は聞いた。しかし今まで聞いたことの無い話だ。地界から来て、そのまま肉体を得るとはな」

そう言いつつも龍岳さんはそんなに驚いているようではなかった。やっぱり政治家つて腹が据わっているんだろうな。

しかし靈奈は俺が肉体を得たことよりももっと気になっていたことがあったようだ。

「それもそうだけど、私は私達を襲ってきた奴のことが気になっているの。あいつはこれまで戦ってきた奴らよりも格段に強かった。解放戦線の刺客なんかじゃない。それにあいつは………青龍聖玉せいりゅうせいぎょ大鎌くたいれんを使ったの」

「何だと！」

「龍真と同じ携帯武具を……？」

「本当なの、靈奈？」

龍岳さんも幽奈さんも、そして妖奈ちゃんまで驚いていた。

「それともう一つ、あいつの目的が真生の靈魂だったことも理由が分からないの。靈魂を横取りしようとした奴なんて初めてよ」

「うーむ」

龍岳さんは目を閉じて顎髭を撫でながら考え込んでいたが、しばらくすると目を開け、大きなため息を吐いた。

「その黒ローブの男が消えてしまった今となつては真相は闇の中だ。しかし、真生君がその黒ローブの男の肉体を奪って生き返ったということは間違いないようだな」

「でも今の真生さんのお姿は生前の真生さんのお姿と一緒になのでし

「よう?」

幽奈さん。そんなに俺を見つめないでください。照れ隠しにボケるしかないじゃないですか。

「はい。……もつとイケメンに生まれ変わった方が良かったですかね」

「うふふふ。真生さんもすごく素敵ですよ」

「そ、そうですね。いや、はははは」

俺が幽奈さんに愛嬌を振りまくと何故か霊奈の視線が険しくなる。汚れを知らないような幽奈さんに俺がいきなり手を出すと思っっているのか? 二人の恋愛感情を究極まで高めてからではないと………つて、そんな俺のポリシーをここで説明するわけにはいかないしな。

「死んだばかりの霊魂が肉体に宿ると同時にその肉体を自分の生前の姿に変えることができると言われてる。もつとも現在は法的にも道義的にもそんな実験をすることはできないから、実際にそうなのかは実証されてはいないが……」

龍岳さんも霊奈の言った仮説を支持するようだ。

「真生君」

「はい?」

「君はその……肉体的に何か違和感を感じるとか、誰か他の人の声が聞こえるとかといったことは無いか?」

「まったくありません」

「……そうか」

俺が即答で否定したこと何となく龍岳さんは落胆しているように見えた。もうちょっとボケた方が良かったのかな?

しかし、ボケようにも俺はこの世界のことを何にも知らない。みんなと色々な話をするには、その前提となる知識が絶対的に不足していた。

「あ、あの、龍岳さん。俺……、とにかく今日この世界に来たばかりで、みなさんが話されている話はほとんど分からないんです。こ

の世界、獄界のことを詳しく教えてくれませんか？」  
「それもそうだな。良かろう。何から話そうか？」

龍岳さんや霊奈が話してくれた獄界についての話を俺なりにかみ砕いて整理してみた。

約二千年以上前、浄化されない靈魂が宿った新生児がたまたま相次いで生まれた一族がその圧倒的な記憶と知識をもって獄界の世界統一を果たした。それは今の地獄がある地域、すなわち地界という日本を支配していた一族だった。

世界の大王となったその一族の長は、その治世を盤石なものとするべく、靈魂浄化の差別化を考えた。つまり、自分の一族の新生児には浄化されていない靈魂を宿らせることで高度な知識と記憶を一族に独占させようとしたのだ。

そのために大王は世界中から高名な十三人の科学者を召し上げ、三十年の歳月を掛けてエンマと地獄を作り上げた。エンマには人の死亡を確実に予測させ、ソウルハンター達には靈魂を漏れなく回収させて地獄に送り、地獄では回収した靈魂を浄化されるまで隔離しておくというシステムを作り上げたのだ。しかし自らが指定する一族の者の死亡が予測された時には、その者の靈魂は地獄に送らずに一族の新生児に宿らせるようにしようとした。

この計画が実行されていたら、大王の一族の治世は永遠に続いていただろう。しかし、十三人の科学者は密かにこれを拒否し、エンマには誰の命令も聞かないような自律的回路を埋め込み起動させた。そして時を同じくして起きた革命により大王の一族は滅亡させられ、十三人の科学者をトップとする革命政府が発足した。

革命政府は、エンマの独占的管理権を持つとした大王のような独裁者を二度と生み出さないために、エンマの膨大な主要プログラムのバックアップを十三分し、十三人の科学者の末裔に分散管理をさせるようにした。その時から現在の獄界の形は基本的には変わっていない。常に真ん中にエンマがあった。暦もエンマが稼働した年

をエンマ暦元年としており、俺が獄界にやって来たのはエンマ暦二〇三一年だった。

ところで、ここで一つの噂話があるそうだ。

十三人の科学者はエンマに、人の死亡の予想だけではなく人の運命そのものを変えて人を自由に死亡させることもできるようにして、その機能を使って大王の一族を滅亡させた後、その人の死亡を操る機能を封印したというのだ。その封印されたプログラムは、特定のキーワードを入力しないと起動しないとされており、そのキーワードを知るためには十三に分けられたバックアップデータを一つにまとめる必要があるらしい。その噂が本当だったら、その機能を手に入れた者は人の生殺与奪を自由に行えることになり、まさに神となる。

話を元に戻すと、十三人の科学者の末裔達は、独裁政治の再来を招かないことを国是として、まずは自らの一族を貴族として、その中から選挙によって元首を選ぶ制度を打ち立てた。そして今から約二百年前、獄界も民度が高まり、市民達から民主主義制度実現の要求が高まってくると、十三の貴族集団はあっさりと身分制度を廃止して、十八歳以上の男女全員による普通選挙が実施されるようになった。

十三の元貴族集団は、大同団結して「神聖自由党」という政党を結成し、各集団は政党の派閥として存続していった。神聖自由党は結成以来、圧倒的な多数与党であったが、近年、野党が大同団結した「民主改革連合」が、「開かれた政治」とか「一部勢力が独占しているエンマ管理権の解放」などと謳いながら、勢力を伸ばしてきているらしい。

この家の主、御上龍岳さんは神聖自由党の副幹事長であり、十三ある派閥の一つ「薫風会」の事務局長でもあった。

そして、龍岳さんには裏の顔もあった。初対面の俺にそんなことまで教えても良いのだろうか？ 龍岳さんは薫風会のプラ

イベートアーミー「獄門の番人」の責任者でもあった。



プライベートアーミーとは、十三の派閥がそれぞれ擁している秘密の私兵組織のことだ。貴族制度時代に有していた騎士団から派生したものだが、民主主義政治の発足以来、その武力のほとんどは治安国軍に吸収されていった。しかし、依然として他の派閥への対抗上、その一部の騎士達が非合法で秘密の私兵組織として再編され存続していたのだ。

プライベートアーミーは、一般の国民にはまったく知らされていない非合法的戦闘集団であるため、さすがに戦車とか戦闘機のように目立つ武器を持つことはできないことから、科学的な研究と訓練に基づき、その所属する戦闘員個々の肉体能力を増強させたり、特殊な能力が使用できるようにするなどして、超人的な戦闘能力を持った戦士。その由来から「闇の騎士」と呼ばれている。が、日の当たらない世界で日夜、抗争を繰り返しているようだ。

そして民主改革連合もプライベートアーミーに似た秘密の戦闘集団を擁しており、それが「解放戦線」と呼ばれるものであった。もともと神聖自由党のプライベートアーミーとは歴史と伝統が違うとかで、霊奈に言わせると「解放戦線」は只の愚連隊だそうだ。

要するにヤクザやマフィアの世界と同じで、水面下では暴力的な抗争を繰り返しながら、表面上は政権与党の主導権争いをしているのが、神聖自由党の各派閥であって、それに野党の民主改革連合が参戦してきているという構図なのだ。

ちなみに黒ローブの男との戦いの際に霊奈が右手から出した剣も「闇の騎士」であれば誰もが有している能力の一つで、空間構成を変化させて自分が登録した武器を自由に取り出せるという「携帯武器」という能力だそうだ。

霊奈は、ソウルハンターであるとともに「獄門の番人」の「闇の騎士」なのだ。つまり、この金髪の女の子はそんな世界に身を置いているということなのだ。

幽奈さんとか妖奈ちゃんはどうなんだろう？ 幽奈さんが武器を振り回す姿は想像できないんだが……。

そう思いながら幽奈さんの方を見ると、幽奈さんは心配そうな顔をして俺を見ていた。

幽奈さんのような、おしとやか系の女性にはこれまでまったく縁がなかった俺には、幽奈さんの放つ「優しいお姉さま」オーラに耐性がなく、幽奈さんに見つめられているだけで目眩が起きてしまいそうだ。幽奈さんに会えただけでも獄界で生き返った意義はあったかもな。

「それで真生さんはこれからどうされるおつもりですか？」

「それは俺の方が訊きたいんですけど……。俺、どうすればいいんでしょうか？」

「私が真生を獄界に連れて来たわけだし、真生が獄界で生活できる環境が整うまではうちで責任を持って世話をしあげなきゃと思っ  
て……。お父様、どうかしら？」

霊奈が龍岳さんを見つめながら言った。

「うむ。これも何かの縁だろう。真生君、この家に住めば良い」

「本当ですか？　ありがとうございます」

地獄で仏とはこのことだ。見た目はちょっと強面の龍岳さんの顔が観音様に見えてきたぜ。

「それじゃ明日から、あんたの家を探してあげるわ。若い娘が三人もいる家に盛りの付いた犬を放し飼いしておくわけにいかないからね」

だから誰が盛りの付いた犬だ。それに家を借りるって俺はただ何の収入源も持ってないぞ。霊奈の奴、優しいのやら冷たいのやら、さっぱり分からない奴だな。

「まあ、いきなり別の世界に来てしまっただけで真生君も戸惑うしかないだろうから、しばらくここにいれば良い」

さすがは龍岳さん。俺は心の中で霊奈にアツカンベーをしてやった。

「幽奈。二階の龍真の部屋が空いているだろう。真生君には龍真の部屋を使ってもらおう」

「はい。毎日お掃除はしていますから、いつでも使うことはできますよ」

「お兄様の部屋をこいつに……。それは……」

霊奈は明らかに嫌な顔をした。こいつはそんなに俺のことが嫌いなのかね。

「良いじゃない、霊奈。どうせ空き部屋なんですから」

「そうだよ。それに妖奈もお兄様が帰って来てくれたみたいで嬉しいかも」

「まあ……。二人がそう言うんなら……」

幽奈さんと妖奈ちゃんの多数意見に霊奈も渋々従った。

そういえば、霊奈や妖奈ちゃんが「お兄様」と呼ぶ龍真さんっていったい誰なんだろう？ あの黒ローブの男が出した大鎌が龍真さんの携帯武具だって話もしていたよな。

「あの、……龍真さんって誰なんですか？」

俺は龍岳さんの顔を見ながら訊いたが、答えたのは霊奈だった。

「私達の兄弟よ。幽奈の弟で私の兄。三年前に交通事故で死んでしまったけど……」

霊奈は本当に悲しそうな表情を見せた。死んで三年経っているというのに、三姉妹の中で一人だけその傷がまだ癒えていないようだ。

「そうなのか……。でも、本当に良いんですか？ その……息子さんの部屋を俺なんかが使わせてもらって」

「かまわん。龍真が死んでもう三年になる。龍真の物はほとんど処分をして部屋には何も無い。気兼ねなく使ってもらえば良い」

幽奈さんや妖奈ちゃん嬉しそうだった。俺を龍真さんの代わりとして歓迎してくれているようだった。でも霊奈には……歓迎されていないことははっきりと分かった。少なくとも龍真さんの部屋を俺に使われることには抵抗感があるのだろう。

龍岳さんもそんな霊奈の様子に気がついたようだ。

「霊奈。龍真はもう戻って来ないんだよ。お前もソウルハンターな

ら三年前に死んだ靈魂が今はどうなっているかくらいは分かっているだろう」

「……………はい」

「僕は真生君は龍真の代わりに神様が使わしてくれたんじゃないかと思えてならないのだ」

「えっ！」

「愛する息子に先に旅立たれた僕の気持ちも分かっておくれ。霊奈」

「あつ……………ごめんなさい。私なんかよりお父様の方がずっと辛かったはずなのに……………」

俺が龍岳さんの息子の代わり？ 俺なんかで良いんだろうか？ 龍岳さんが俺に何かを期待しているのであれば期待はずれになる公算が強いと思うのだが……………。でも、俺も行く所も無いんだから追い出されるまではご厚意に甘えるしかない。

ぐうゝ。

まったく空気の読めない奴だ！ 俺の腹の虫が応接間に響き渡った。

とりあえず当面のねぐらを確保できたことで一安心した俺の体が次の要求を突き付けてきたようだ。……………霊奈の奴、また俺を睨んでやがる。龍真さんは腹の虫を鳴らす事もなかったのか？ 生理現象だから仕方無いだろう。

妖奈ちゃんもお腹を抱えながら幽奈さんに向かって言った。

「そつだ。幽奈。妖奈もお腹減った」

「はいはい。それじゃ、ご飯にしましょうか。真生さんもどうぞ」

「えっ、でも急に来てしまつて大丈夫なんですか？」

「ええ」

「幽奈は料理の天才だから、一人分くらいすぐ追加できちゃうんだよね」

俺はみんなと一緒に廊下の奥にあるキッチンダイニングに行った。政治家の家だからお手伝いさんがいるかと思つたが、夕食の準備は幽奈さんの役目のようで霊奈と妖奈ちゃんも盛りつけや皿配りを

手伝っていた。

「それじゃ、真生君はそこに座りたまえ」

自分の部屋で着流しに着替えて来た龍岳さんの指示どおりに俺は食卓に座った。龍岳さんが長方形のテーブルの短辺に座り、龍岳さんから見て右側の長辺に、龍岳さんに近い方から幽奈さん、妖奈ちゃん、龍岳さんから見て左側の長辺に龍岳さんに近い方から靈奈、そして俺が座った。

夕食は、ほかほかご飯と味噌汁、トンカツに芋の煮っ転がし、サラダ、お新香というメニューで、ちゃんと俺の分もあった。

「いただきます」

妖奈ちゃんの元気な声で夕食は始まった。

しかし……、この料理の美味さは何だ。どのおかずも三つ星だ。

「これって、全部、幽奈さんの手作りなんですか？」

「ええ、料理は好きなんです」

うちはお袋もパートで働いていたから、食事は冷凍食品かスーパーの総菜がほとんどだったからなあ。こんなに美味い手作りの食事は久しぶりだ。

「真生さん。お代わりもできますから遠慮なさらずにね」

「はい。ありがとうございます」

気がつく俺のお茶碗は既に空っぽだった。俺は一応遠慮がちにお代わりをお願いした。

龍岳さんはお銚子に入ったお酒を手酌で飲みながら、別メニューの晩酌セットを味わっていた。

「ところで真生君は、あちらの世界では学校に通っていたのかな？」

「はい。高校二年生でした」

「私にあんたの死亡予定レポートを読んで知っていたけど、あんた全然高校生らしく見えないわよ。何か弾けるものが無いのよね」

ほっとけや！ 悪かったね。運動不足でちよつと腹も出ているよ。

「それでは靈奈と同学年ですね」

幽奈さんが優雅な笑みを浮かべながら俺と霊奈を見比べた。

「霊奈が高校生？ お前、ソウルハンターをしているんじゃないのか？」

「だから私は囑託でやっているって言ったでしょ。ソウルハンターは人数が少ないから学生でもできるのよ」

霊奈が俺と同じ年だって……。俺は地界で自分が通っていた高校の同級生の女子を思い出してみた。……………霊奈の奴、……………発育が良すぎだろう。

「ちよつと！ 今、何を考えていたのよ？ 何だか目付きに嫌らしさが充満していたんだけど」

霊奈は読心術でも心得ているのか？ それとも俺の目線があからさまに胸に向かっていることを見抜かれたのか？

胸を抱き抱えている霊奈の邪険な目線が俺を突き刺していた。

いかん。このままでは「変態はこの家から出て行け」と龍岳さんに引導を渡されるおそれがある。とりあえず反論をしておかなければ！

「馬鹿言つなよ！ こんな純情少年を捕まえて変態みたいに言うな！」

「何言っているのよ！ あんたは初めから全然純情そうに見えなかつただけだよ！」

「それはお前に男を見る目が無いからだろ！」

「あんたが純情少年だったら世の中のすべての男が純情少年になつてしまっじゃないの！」

「どういうことだよ？ それじゃ俺は女たらしに見えるのか？」

「それも有り得ないわね。あんたに憧れる女の子がいたら視力検査を勧めるわね」

「何だと！」

隣の席に座っていた俺と霊奈は箸と茶碗を持ちながら睨み合った。俺には目から火花が出ているのが見えたぞ。

「あらあら、今日初めて会ったのに、もうそんなに仲良しになって

いるんですね」

えっ！

気がつくとも霊奈と至近距離で見つめ合っていた。霊奈もそれに気がついたようで、顔を赤くしながら自分の席に真っ直ぐ座り直した。「幽奈！ 私達のどこが仲良しなのよ？」

「そうですよ、幽奈さん。こいつがいちいち突っかかってくるんですから」

「おいおい。夜に大きな声は近所迷惑だ」

龍岳さんに叱られて俺と霊奈は揃ってしょんぼりしてしまった。でも龍岳さんはすぐに笑顔になって俺の方を見た。怒った顔が怖いだけに笑顔を見るとほっとするような気がする。時には厳しく政敵を追及し、時には有権者に笑顔を振りまく……政治家としてこのギヤップは効果が大きいんだろうな。

「ところで真生君。これから君は獄界の人間として生活をしなければならぬ。明日から霊奈と一緒に学校に行くようにしなさい。手続きの方が儂が一切やっておく」

「はい。分かりました」

「ああ、そうだ。幽奈」

「はい」

「龍真の制服はまだ残っていたんじゃないか？ 真生君は龍真と同じ体格だから合うんじゃないかな？」

「お父様の部屋のタンスの中に仕舞っていますから出してアイロンをかけておきましょう」

「お兄様の制服をこいつに……」

また霊奈が俺を睨んだがそれ以上愚痴を言うことはなかった。

霊奈がこんなに大好きだった龍真さんってどんな人だったんだろう？

「龍真さんは俺に似ていたのかな？」

「お兄様とあんたとは全然違うわよ。お兄様は強さと優しさを兼ね備えた素晴らしい人だったから」

「何それ？俺にだって優しさはあるぞ。強さっていうと自信が無いけど……」

「お兄様の優しさは海のように広く、強さは『獄門の番人』一番だったの。あんたとは太陽と豆電球くらいの違いがあるのよ！」

散々な言われようだ。霊奈の奴、どこまで兄貴のことが好きだったんだ。……でも、その大好きだった兄貴の代わりが俺じゃあ、……霊奈の怒る気持ちも分からんでもない。

「ねえねえ。もう真生さんは私達の家族でしょ。龍真お兄様の代わりなんだから」

妖奈ちゃんに龍岳さんも嬉しそうに頷いた。

「それじゃ、私は『真生お兄様』って呼んで良い？」

「いや、あの、『お兄様』ってというのは俺のキャラ的に向いていないと思うんだよね」

「確かにそうよね」

霊奈！一応、俺なりに遠慮して言っているんだから真正面から同意しないでくれる。

「向こうの世界では、妹から『お兄ちゃん』って呼ばれていたから、よければその呼び方で呼んでもらえないかな」

「分かった。それじゃあ『真生兄ちゃん』って呼ぶね。えへへ」

俺の正面に座っていた妖奈ちゃんは本当に嬉しそうだった。妖奈ちゃんは喜怒哀楽がストレートに顔や態度に出るタイプみたいだ。でもその成分の九十五パーセント以上が『喜』と『楽』の成分のようで、その楽しそうな笑顔を見ているとこっちまで楽しくなってきた。そう言う意味では天性のアイドルなのかもしれないな。

それにしても……この三人、本当に姉妹なんだろうか？顔は似ているといえば似ているような気がするが、髪や瞳の色だけではなく性格も違いすぎる気がする。

「あの、幽奈さんや妖奈ちゃんは本当に霊奈の姉妹なんですか？」

「どういう意味よ？」

何で霊奈が怒るんだよ？



「いや、髪の毛の色とか目の色とか全然違っなって思ってたさ」

「間違いない姉妹ですよ」

幽奈さんがそう言うのと理屈抜きで信じたくなくなるね。

「そうなんですね。獄界では兄弟でも髪や目の色が違うことって珍しくないんですか？」

「ええ、そうよ。私達は特に意識もせず不思議とも思っていないけどね。地界みたいに国が別れていないからじゃない」

獄界では二千年以上前から地球が一つの国家だったんだよな。そうすると元々各地に別れて住んでいた人種の交流が活発になるからその遺伝子情報がクロスオーバーで蓄積されてきているんだろつな。つまり幽奈さんは東洋系の先祖の、霊奈は西洋系の先祖の遺伝子情報を受け継いでいるんだろつ。でも、そうすると……妖奈ちゃんのお先祖はいつたい何系なんだ？ アニメ系？

「ところで、真生」

また霊奈が俺を睨んでいた。

「さつきから気になってるんだけど、幽奈は『さん』付けで、妖奈は『ちゃん』付け。何で私だけ呼び捨てなのよ」

「だって、霊奈だって俺のことを呼び捨てで呼んでいるじゃんか。それに同い年なんだし良いじゃん」

「良いじゃんじゃないわよ」

「じゃあ、何て呼んでもらいたいんだよ？」

「そうねえ、……霊奈様が良いわね」

霊奈様〜！ 似合わね〜。幽奈さんなら様付けでも相応しいが、霊奈には姫様属性は無いだろつ。

「何、笑っているのよー！」

食事の後、俺は風呂に入った。浴室自体はけっこう古かったが、一応、シャワーも付いていた。娘の要望で後から取り付けたんだろつか？

身体を洗っていると、曇りガラスの向こうから幽奈さんが声を掛

けてきた。

ひよっとしてお背中でも流してくれるとか？

「真生さん。取りあえず下着と寝間着を買ってきましたので置いておきますね。私が見た目で決めたサイズのものを買ってきたので合わないかもしれないかもしれませんけど……」

「あ、ありがとうございます」

いかんいかん。幽奈さんにそんなよこしまな感情を抱くだけで罪悪感を覚えてしまう。俺の妄想の中でさえ、清楚な幽奈さんを汚すことは許されないのだ。……でも、妄想を止めるだけの理性を持ち合わせているかと訊かれると……自信は無いな。

夕食の時の話によれば、幽奈さんは十七歳の霊奈より四歳上の二十一歳。大学に行っていたが病気で体調を崩してしまい、今は元々好きだった家事に専念しているということのようだ。ちなみに龍真さんは幽奈さんの一つ下で生きていれば二十歳。妖奈ちゃんは霊奈よりも三歳下で十四歳の中学二年生だそうだ。

俺は風呂から上がると、幽奈さんに案内されて龍真さんの部屋だった二階の一室に入った。家具も何も無い部屋の真ん中に布団が一つ敷かれていた。

「何もなくてごめんなさい。明日には生活用品を揃えますから」

「いえいえ、とんでもない。野宿しないだけでもありがたいです」

「ふふふ。では、おやすみなさい。明日は七時には朝食を食べられるように準備しますから、それまでにダイニングに集まってくださいね」

「分かりました。おやすみなさい」

幽奈さんは深々とお辞儀をして部屋から出て行った。

幽奈さん、……良い！ 素敵だ。俺もこんなお姉さんが欲しかったぜ。エロゲでもお姉さんプレイはしたことがなかったから、俺にこんな属性があったなんて新発見だ。だが、そんな自分の新しい一面を見つけたからと言ってはしゃいでいても仕方が無い。明日はさっそく獄界の学校に行くことになったんだから、今日も

う寝るとするか。

俺は布団に入り枕元の電灯を消して目を閉じた。

今日は本当に色んなことがあったな。……………ひよっとして、朝、目が覚めると、地界にある俺の家の俺の部屋のベッドで目が覚めて、親父とお袋と美咲の顔を見ながらトーストとベーコンエッグの朝食を食べているんじゃないか？ やっぱり夢なら醒めてほしいという気持ちもあつたが、そうすれば幽奈さんとはもう会えないってことだ。それはそれで寂しい。

そんなことをつらつらと考えながら俺は眠りに入った。

俺は気が付くとまた暗闇の中にいた。

やっぱり夢だったのか？ するとここは地界の俺の家の俺の部屋……………じゃないみたいだ。……………部屋の中なのか外なのかも分からなかった。

目が暗闇に慣れてくると、俺は黒い背広を着た男達に囲まれていることが分かった。みんな剣を持っている。

何なんだ、お前達は？ ……危ないじゃないか。そんなもん仕舞えよ。

しかし、男達は問答無用で一斉に俺に襲い掛かって来た。

俺は体中を串刺しにされた。

「……………！」

目が覚めると、カーテンの隙間から差し込む朝の光で明るい部屋にいた。……………龍真さんの部屋だった部屋だ。

あの黒ローブの男のことが記憶に残っていたのか、とんだ悪夢を見てしまった。体中に汗をいっぱいかいていた。俺は目だけを動かして部屋を見渡してみた。もちろん剣を持った黒服の男達はいない。

やれやれ。昨日は、死んで、時空を越えて並列世界に来て、襲われて、そして生き返って……………と、てんこ盛りな一日だったんだから、夢だけでももつとのんびりしたかったぜ。幽奈さんに「あゝ

んして」とか言われながら飯を食わせてもらっている夢とか……。  
んっ？

寝起きのブーツとした状態からやっとな頭がアイドリグ状態になった俺は、お腹の辺りに何かがあるような重みを感じた。まさか……。

俺は起き上がろうとしたが重さで起きあがれなかったので、とりあえず首だけ起こして見てみると、そこには黒服の男……じゃなくて、パジャマ姿の妖奈ちゃんが俺の掛け布団の上に猫のように俯せに横たわっていた。

「ちよ、ちよつと、妖奈ちゃん」

俺は何とか上半身を起こして、妖奈ちゃんを揺さぶった。すると妖奈ちゃんは眠そうに目を開けて俺を見つめた。

うゝむ、さすがアイドルしているだけあって、寝ぼけ眼の妖奈ちゃんも危険なほど可愛いぞ。

「ふあゝ、……あつ、お早う。真生兄ちゃん」

「お、お早う。……じゃなくて！　なんでここにいるんだよ？」  
「あれっ？」

妖奈ちゃんはキョロキョロと辺りを見渡して自分の部屋じゃないことがやっとな分かったようだった。

「そうか。トイレに行った時に部屋を間違えたみたい。よくやるんだよね。へへへ」

「『へへへ』じゃなくて」

「じゃあ、おやすみ」

妖奈ちゃんは四つん這いになりながらドアの方に向かって行った。  
やれやれ。

枕元の目覚まし時計を確認すると午前六時五十分だった。確か七時から朝食だったから、後、十分は寝ることができるぞ。とりあえず七時まで寝よう。

俺はまた掛け布団を被って横向きに寝ながら再び眠りに着こうとした。

んっ？ …… 今度は背中に何か動くものを感じるぞ。 …… 何だ？ やっぱり刺客が？

俺がすばやく掛け布団をはね除けて振り向くと、 …… 妖奈ちゃんが俺の背中に張り付くように寝ていた。

さっき部屋から出て行ったんじゃなかったっけ？ …… いや、よく考えるとドアが閉まる音はしなかった。どうやら一旦ドアの方に這って向かっていた妖奈ちゃんがリターンして俺の布団に舞い戻って来たようだ。

「ちょ、ちよつと、妖奈ちゃん！ 起きなよ」

俺は、横になったまま身体を反転させ妖奈ちゃんと向き合うようにして、妖奈ちゃんの身体を揺さぶった。

「うっん、おやつまだ？」

今度はなかなか起きないぞ。それにしても寝起きの悪い娘だ。

「真生。朝ご飯できたぞ。早く起きろ！」

間が悪い時はとんでもなく悪い時があるよな。ドアがノックされると同時に、既に学校の制服姿の霊奈がドアを開けて俺の部屋に入ってきた時、俺は妖奈ちゃんと添い寝をしているみたいなたまげな体勢になっていた。

霊奈の顔に青筋が立つのが見えた。

「あ、あんたは幼気な中学生にいったい何をしているんだ！」

霊奈の右手から剣が出てきた。朝っぱらからそんな物騒な物を出すな！

「違う、違うんだ！ 誤解だっつ！」

この日の朝食も鮭の塩焼き、卵焼き、焼き海苔、野菜のお浸しと純和風定食だった。

幽奈さんは、今朝は薄紅色の着物に昨日と同じ割烹着を着て、ご飯をお代わりした俺のお茶碗にご飯を山盛りに盛っていた。

「はい。たと食べてくださいね」

「『居候、三杯目にはそつと出し』っていうことも知らないみたい

ね」

誤解は解けたはずなのに、なんで朝からそんなにカリカリしているんだろうな、霊奈の奴。しかも俺はまだ二杯目だ。……だが、このおかずの美味さでは三杯目も軽くいけるぞ。

妖奈ちゃんにはひまわりのイラストの付いた黄色いパジャマ姿のまま、俺の前で朝食を摂っていた。

「ごめんね。真生兄ちゃん。今まであの部屋は誰もいなかったから間違っても朝まで寝放題だったんだよね」

まだツインテールにしているボサボサの長髪も寝起きの顔も、フアンの男達が見たら失望するようなこともなく、やっぱり可愛い。あの龍岳さんからどうしてこんなに綺麗で可愛い娘達が生まれたんだ？ 死んだという霊奈達のお母さんは余程美人だったんだろっな。

それはそうと……、地界の俺の家では親父が食事の時にはテレビをつけない主義だったから、俺は食卓にテレビの音声が流れていることにやや戸惑っていた。

「食事の時には、いつもテレビをつけているんですか？」

「お父様は政治家ですから、朝はあちこちのニュース番組を見るようにしてて、うちは昔から朝食時にはいつもテレビをつけているんです。真生さんが気になるのであれば消しますけど？」

「いえ、全然、大丈夫ですよ」

幽奈さん、あなたを責めている訳ではないんです。そんなに申し訳ないような顔をしないでください。……しかし、神様は何故、幽奈さんの優しさを少しは霊奈に分け与えなかっただろうか？

テレビのニュースでは鬼崎という総理大臣が記者達に囲まれてインタビューを受けていて、地獄業務の民営化について改めて反対の意思表示をしていた。

これが総理大臣？ 総理だなんて言われなかったら焼鳥屋でくだを巻いてそうな疲れたバーコード親父だぞ。……でも、人は見た目じゃ分からないからな。本当はきつとすごい人なんだろう。

しばらくすると龍岳さんがダイニングにやって来た。昨日の夜遅くにまた家から出掛けていたが、いつ帰って来たのかは気づかなかった。

「お父様。朝食はどうされますか？」

「すぐに出なければならぬ。コーヒーだけでよい」

「分かりました」

幽奈さんがキッチンにコーヒーを入れに行った。

「真生君。昨日はよく寝られたかな？」

「あつ、はい。お陰様で……って言いたいところですが何か変な夢を見て……」

「変な夢？」

「はい。大勢の男達に囲まれて剣で刺されてしまう夢でした。何だか妙にリアルで……」

「……そうか」

龍岳さんには何か思い当たる事があるように思えた。

でも俺の夢が龍岳さんとどんな関係があるというんだ？ 龍

額さんは乙女のように夢占いでもしているのか？

龍岳さんは幽奈さんが持って来たコーヒーをちよつとすすつただけで席を立った。

「途中、寄る所があるから、もう出掛ける」

霊奈と妖奈ちゃんの「行ってらっしゃい」の声に送られて龍岳さんはダイニングを出て行った。幽奈さんも龍岳さんの鞆を持ってダイニングを出て行った。

丁度その時、テレビでは政治のニュースが終わり芸能関係のニュースになった。

どうやら今、獄界では「鬼っ子クラブ」という女の子十人のアイドルグループが人気絶頂のようで、新曲発表会に五万人が集まったというニュースをしていた。しかし……この女の子達の格好ときたら、ブラとミニスカートで、しかも布の面積も異様に狭い。朝のニュース番組には刺激が強すぎだろう。

あんまりこの娘達を注視していると、また霊奈から変態扱いされかねないぞ。後ろ髪を引かれるが、ここはテレビから視線をはずして妖奈ちゃんに話を振ってみよう。

「妖奈ちゃんも彼女達は知っているんだよね？」

「もちろん知っているよ。でも私は路線が違うから」

「路線？」

「私にはこんなに胸が無いことは真生兄ちゃんも知っているでしょう」

妖奈ちゃん。誤解を更に複雑にするようなことは言わないように！ 服の上からでも胸が残念なのは分かるけど、直に触ったんじゃないかとか誤解している奴がこつちを睨んでいるからさ。

「真生！ 早く食べなさい！ このままじゃ遅刻しちゃうわよ」

霊奈の青筋に急かされて三杯目のご飯を味噌汁で流し込んだ俺は霊奈と一緒に玄関を出た。

「行ってらっしゃい」

「行って来ます」

玄関先で幽奈さんが優しく手を振って見送ってくれた。学校に出掛けるのに誰かに見送ってもらえるのは初めてだ。なんだか新婚さんになった気分だ。

お出掛けのチューとかは……まあ、ないだろうな。

俺は霊奈と並んで歩き出した。学校の制服姿の霊奈もよく見れば学園ドラマのヒロインになれるくらいは可愛かった。

女子の制服は、胸ポケットにエンブレムが付いたベージュ色のジャケット、白いワイシャツに赤いリボン、チェック柄のミニスカート、紺色のハイソックスに茶色のローファーだ。俺の着ている男性用の制服は、リボンがネクタイ、スカートがズボンになっている以外は同じ配色と柄だった。

しかし、龍真さんってよっぽど俺と体格が似ていたようだ。

俺が着ている制服はジャストフィットだ。

「ちよつと、あんまりこつちに近寄らないでくれる。変態が移るか



ら

並んで歩いているんだから仕方無いだろう。一緒に行くのが嫌なら学校までの地図を渡してくれれば良いものを。それにしても……妖奈ちゃんの場合、俺はどうすれば良かったというんだ？

とにかく俺がすぐに女の子に手を出すような男ではないことは自分でも分かっているつもりだし、霊奈だってすぐに分かるだろう。俺にはそんな度胸なんて無いのさ。

ところで朝の通学路。俺と霊奈は歩道を歩いていたが人通りはそれほど多くなかった。

一方で車道には黒塗りの高級車が次から次に通り過ぎて行った。高級住宅街であるこの周辺には政治家とか会社の社長とかがいっぱい住んでいるんだろう。その車のうち何台かの後部座席には学生らしき姿も見えた。

「なあ、霊奈」

「何？」

「霊奈は天下の政権与党の副幹事長の娘なのに歩いて登校しているのか？」

「どういうこと？」

「いや、セレブな家庭のお嬢様はみんな車で送り迎えされているものだと思うんだけどさ」

「私は別にセレブなお嬢様なんかじゃないわよ。それに家から学校はすぐ近くなのに車で行くなんてもったいないじゃない」

「ふん」

「毎日、車に乗って移動していると何だか体が鈍ってきそうな気もして、いざという時に困るかなって思うしね」

「いざという時」とは、あの黒ローブの男に襲われた時のようなことを言っているんだろうか？

昨日の話から「獄門の番人」の責任者である龍岳さんが襲われるかもしれないってことは分かるが、「闇の騎士」だとはいえ、まだ

高校生の霊奈が襲われるということはどういうことなんだろうか？  
霊奈だけではなく幽奈さんや妖奈ちゃんも襲われる危険があるんだろうか？

「霊奈。霊奈の強さは俺も見せてもらって分かっているけど、幽奈さんや妖奈ちゃんは襲われることはないのか？」

「私の家には常に人工結界を張っているから、いつも家にいる幽奈は大丈夫よ」

「結界？ 結界って何だ？」

「結界というのは、空間構成を変換して一定範囲の空間を閉鎖してしまうものよ」

「空間が閉鎖されるってどういうことだ？」

霊奈は立ち止まって辺りを見渡した。俺もつられてキョロキョロと見渡してみたが、辺りには誰もいなかった。

霊奈が右手を天に向けて伸ばすと、突然、周りの景色が揺らいで見えるようになった。

「今、私が小さな結界を張ったわ。この結界の中にはあんたと私しかいない。真生。私から離れて行ってみて」

「よし！」

俺は霊奈から離れるように歩いて行った。しかし、五メートルほど行ったところで目に見えない柔らかい壁のようなものにぶつかってそれ以上前には進めなかった。手を伸ばして触れてみると柔らかく透明なゴムのような感覚で、まるでシャボン玉の中にいるような錯覚を覚えた。

「これが結界なのか？」

「そうよ。結界を張ると外からの侵入者を防ぐこともできるし、中から逃げることもできないようにすることもできる。それから……」

丁度その時、そのシャボン玉の外を男子学生が二人話しながら通り過ぎて行ったが、道の真ん中に巨大なシャボン玉があることも分からないようだった。

「彼らは歩道の真ん中を歩いているんだけど、結界がある所は空間

が歪んでいて、彼らは結界の縁に沿って曲がって歩いていることに気がつかないでまっすぐ歩いていると感じているの。実際、彼らは歩道から出ていないでしょ」

確かに男子学生達はガードレールを超えることなく歩道を歩いて通り過ぎて行った。つまり結界の中にいる俺から見るとガードレールで車道と隔てられている歩道の幅が十メートルほどに拡大しているように見えているんだが、結界の外ではこの巨大なシャボン玉は存在していないと同じなのだ。

「外からは俺たちも見えていないのか？」

「ええ、そうよ。『闇の騎士』であれば、ほとんど全員が結界を張ることができるはずよ。結界を張ることで闇から闇に人を消すことができるから必須の能力ということね」

「人から見えなくて、しかも入れない場所を作っておいて、その中で人を密かに消すということか？ ……でも死体はどうやって処理するんだ？」

「結界にも色々と種類があって、結界自体を消滅させるとその中にあった靈魂を失った肉体と一緒に消滅させてしまうこともできる結界もあるの」

「なるほど。まさしく暗殺者用の結界というわけだな？」

「ええ。私の家に張っている結界は機械で発生させているもので、単に侵入者を防ぐという役割しかないものよ」

「目に見えないバリアを張っているみたいってことか？」

「そう考えてもらって良いわ。家族でしか結界を通ることができないようにセットされているの。あんたも、朝、玄関の扉で生体認証をセットしたでしょう。それは扉の解錠プラス結界の解除のために必要なの」

「そうか。だから幽奈さんは家にいる限りは安全ということなんだな？」

「ええ」

「それじゃあ、妖奈ちゃんは？ 妖奈ちゃんも学校に行っているん

「だろう？」

「やっぱり妖奈のことも気になるんだ。……ロリコン」

そのジトつとした目で俺を見るのは止めてくれ。

「俺にだって妹はいたんだ。年下の女の子に欲情する奴の気は知れない」

「どうだか？ ……まあ、良いわ。信じてあげる。妖奈は女子校の中等科に通っているんだけど、事務所の車で通っているのよ」

「事務所って？」

「妖奈の所属している芸能事務所よ。あの子も学校と仕事を両立させて、けっこうハードスケジュールをこなしているからね。学校の外でもマネージャーとか事務所の関係者がいつも近くにいるから、妖奈も襲われることはないはずよ」

「どうして？」

「関係のない第三者達と一緒にいる時に結界を張るとその第三者も一緒に結界に入り込んでしまうでしょ。プライベートアーミーはその存在自体を秘密にしているから関係のない第三者を巻き込むことは絶対にしないわ」

そう言つと霊奈は辺りを見渡して誰もいないことを確認すると結界を解いたようで、揺らいでいた辺りの景色がはつきりと見えるようになった。

「霊奈も結界を張れるってことは、それを利用して、その、………危険な事とかしているのか？」

「人を殺したりとか？」

「あ、ああ」

「私がそんな人間だったらどうする？」

霊奈は俺の答えが気になるように上目遣いに俺の顔を見た。

「霊奈は意味もなく人を殺すような人間じゃないだろう？ 俺はそう信じている」

「……………私は自分から結界を張って人を殺したことはないわ。でも、敵が張った結界の中で襲われてくることは何回もあって、自分

の身を守るために敵を殺したことはあるわよ。……軽蔑する？」

「いいや。実際、黒ローブの男に襲われた時に、あいつを倒さなくっちゃ、こっちの命が危ないってことは俺も身に染みて感じた。生か死かって時には仕方が無いよな」

「……………」

「でも、どうして靈奈が襲われるんだ？ 龍岳さんが『獄門の番人』の責任者なんだろう？」

「お父様にも秘書とか政党の職員とか、あるいはマスコミ関係者がいつも一緒にいるから、お父様が一人になるということはほとんどないからじゃないかな？ でも、私は一介の女子高生だからね」

「それならなおさら靈奈も車で移動した方が良くないじゃないのか？」

「私が襲われやすくしていれば、お父様や幽奈とか妖奈に矛先が向くことは無いでしょう」

「えっ、……お前は自分を家族の盾にしているのか？」

「お兄様がない今、私がするしかないのよ」

「お前って奴は……………、あんまり無茶をするなよ」

「……………分かってるって。……………あつ大変！ 遅れそう。真生、走るわよ」

「おい、ちよつと待ってくれよ」

ちよつと顔が赤くなっていたような気がしたが、それを確認する隙もなく靈奈は駆けだした。

それにしても……………靈奈、足速すぎ！

俺はぜいぜいと息を切らしながら靈奈の跡をついて行くしかなかった。

靈奈が通っている私立柳が下学園高等部は家から歩いて十五分ほどの所にあつた。雰囲氣的に良家の子女が通っているハイソな学園という感じだ。その敷地は俺が地界で通っていた公立高校よりも遙かに広く、校庭は芝生で覆われ、その周りも公園のように整備されていた。また、校舎は赤煉瓦で建築されていて伝統もありそうだ。

俺は霊奈と同じ二年二組に編入された。霊奈と一緒に教室に向かっている。と霊奈が念を押してきた。

「いい、真生。あんたは私の母方の遠い親戚で、親の背負った借金から逃れるために親元から離れて私達の家で匿ってもらっているということにしているから。間違っても地界から来たなんて言わないようにね。分かった！」

何でそんなに不幸な設定なんだよ！ 転校前の学校で身の危険を感じるほど女子生徒達から追いかけて回されたため、避難してきたイケメンっていう設定でも良いんじゃない？ ……無理かな……やっぱり。霊奈に教え込まれたとおりに自己紹介しておくか。

しかし、生徒数三十名ほどの二年二組だけ見ても人種のるつぼという感じで、アメリカンスクールに転入してきた感じだ。見た目は外国人のクラスメイトに囲まれていると何となく気後れしてしまうのは、俺が生粋の日本人だからだろう。

ただ、クラスメイト全員が日本人的な名前を持ち、日本語をしゃべっているから、そのうちには慣れるだろう。

一時限目のホームルームが終わって休憩時間になると、一人の男子が俺の席に近づいて来て話し掛けてきた。男子にしては身長は低い方で、天然パーマの黒髪にラテン系の顔立ちをしている、見るからにおちゃらけキャラな野郎だ。

「旦那。あつしですが」

誰が「旦那」だ。それに「あつし」だなんて、お前は岡っ引きか？

「俺はお前を知らないぞ」

「嫌だなあ。初対面ですけど、あつしは旦那とは初対面という感じがしないんですがすよ。もう何と言うか生まれながらにして親友というか一心同体というか」

男と一心同体は御免被りたい。

「だからお前は誰なんだよ？」

「これは失礼いたしやした。あつしは山里狐林やまのこりんと申しやす。以後、

お見知りおきを」

「こちらこそよろしく。俺もこの街には初めて来て右も左も分からないからさ。色々教えてくれよ」

「ご心配には及びませんぜ。あつしがこと細かく親切丁寧にお教えさせていただきやす。ところで、旦那は霊奈さんの家にご厄介になつているとのこと。いや、羨ましい限りですな」

「何だ？ お前は霊奈のことが好きなのか？」

「霊奈さんは才色兼備のお嬢様ですからね。あつしなんかには見向きもしてくれませんか。それよりも、あつしはどちらかというとな奈ちゃんの方が……」

確かに霊奈は気に入らない奴とは口も利かないって感じたが、妖奈ちゃんは誰とでも笑顔で接してくれそうだ。それもアイドルの営業スマイルじゃなくて天然の明るさって感じでだ。昨日一日だけが妖奈ちゃんと話していて俺もそう実感した。だからこの野郎の選択眼は間違つていない。

「霊奈さんの家にいるということは妖奈ちゃんとも一緒ということですがすよね？」

「まあ、もれなく一緒に住んでいるけどね」

「真生の旦那！」

狐林はいきなり俺の両手を掴んで至近距離で俺を見つめた。

だから俺は男には興味は無いんだよ。

「旦那とあつしはもう親友ですがすよね。そうだ！ 今度、旦那の家に遊びに行かせてもらっても良いですが？ うん、いつがよろしいですか？ あつしはいつもOKです」

ちよつと待て。俺の家というより妖奈ちゃんの家ってことだろうが。……こいつは危ない。真正銘のロリコン変態野郎だ。兄代わりとして妖奈ちゃんをこいつの毒牙から守ってやらねば。

「俺もまだ御上家にお世話になり始めたばかりだから荷物の整理もできてなくてな。そんな汚い部屋にお前を招待するわけにはいかないだろう」

「あつしが駆けつけて一緒に整理しやすぜ」

「いや、他人に見られたくないものとかあるし……。分かるだろう、男なら」

「……お宝本ですかい？ それとも秘蔵ディスクですかい？ そういう物の整理なら全くご遠慮なさらずとも結構ですぜ。何なら旦那の知らない間にコレクションを増やしとくこともできやすぜ」

自分のお古を都合良く押し付けるだけだろうが。……。……。獄界のそういう物も見てみたい気もするが。……。いかんいかん。こんな誘惑に負けていたら、今度こそ霊奈に殺される。ここはピシツと言つとかないとな。

「とにかく、自分も今は居候の身分なんだから勝手に友人を家に招待することはまだ気が引ける。もうちょっと慣れてきたら考えるよ」「そうだがすか。……。残念ですが。真生の旦那、その時がくればいつでもあつしをお呼びくださいまし」

「ああ、分かったよ」「おつ、そろそろ次の授業が始まりやすね。それでは失礼いたしやす」

大仰な挨拶を残して、狐林は同じクラスの一番前の席に帰って行った。

それにしても、獄界全体なのか、この学園だけなのかは知らないが、授業のレベルは高すぎだ。地界で通っていた公立高校でも平均点以下をうろろろしていた俺だからな。こりや及第できるか心配だ。只でさえ霊奈に馬鹿にされているのに、これじゃあしばらく立ち直れそうにないぞ。

休み時間になり俺は疲れ果てて机に突っ伏していた。

こんなに勉強に頭を使うことは最近なかったな。ずっとこんな状態では勉強のしすぎでまた死んでしまうぞ。

突然、頭を小突かれた。顔を上げると霊奈が俺の机の側に立っていた。



「もうギブアップなの。情けないわね」

「俺が通っていた高校よりずっとレベルが高いんだよ。それに今日から通い出して、いきなりエンジン全開にはなれないだろ」

「もう、本当にヘタレね」

うるさい。何とでも言え。俺はいきなり違う世界に来て生きているんだ。頭が正常さを保っているだけでも自分で大物だと思っ  
ぜ。

「それより次の授業は体育よ。早く着替えて校庭に行かなきゃ駄目よ」

「どこで着替えるんだ？」

「校庭の横に更衣室があるから体操着を持って行きなさい」

そういえばスクールバックの中に体操着も入っていたな。これも龍真さんが着ていたやつなのかな？

今日の体育は五十メートル走測定だった。俺は十五人の男子中八位の順位。可もなく不可もなくという俺のライフスタイルを象徴している数字だ。ちなみに最下位は狐林の奴だった。

男子が全員走り終えた後、女子の番になった。男子達がグラウンドの隅に座って女子の走りを見ていたが、予想どおり霊奈がダントツのトップだった。俺のラップタイムより速い。

「やっぱり霊奈さんはすごいがすね」

俺の隣で座っていた狐林が呟いた。

「とにかく成績は学年でトップクラスでスポーツも万能、その上あの美貌ですからね。霊奈さんはこの学園のマドンナなんですよ」

あの美貌ね……。まあ、見た目は可愛いことは認めるが、みんなは霊奈の暴力的性格を知った上でその評価を下しているんだろ  
うか？

昼食は幽奈さん特製の弁当を狐林と一緒に学生食堂で食べた。弁当は二段重ねでお花見の時に食べるような超豪華弁当だった。どれ一つとして冷凍食品などではないようだ。幽奈さん一人でこれだけ

の品数を料理するなんて信じられない。妖奈ちゃんが言っていた「料理の天才」という称号を贈ることに誰からも異論は出ないだろう。

狐林の弁当は、何故だか分からないが大きな弁当箱の中に焼きそばが単品大盛りで入っていた。とことん変な奴だが、下心があつたとはいえ、転校初日から俺に話し掛けてくれた狐林のことがなんだかんだ言っただけ俺は気に入っていた。

「なあ、狐林」

「なんでがす？」

「お前の親って仕事は何をしているんだ？」

「あつしの父親は靈魂管理庁に勤めていやすぜ」

「それじゃあ、死神、……いや、ソウルハンターなのか？」

「とんでもない。ご存じでしょうけど、ソウルハンターになるには超難関試験に合格しなきゃならないんでっせ。ソウルハンターは獄界の超エリートな職業なんですがすよ。うちの親父はノンキャリアの事務職がすよ」

「そつなのか？」

霊奈の奴、どこまですごいんだ。霊奈は勉強も運動もオールマイティな奴だが、そのことを自慢して鼻に掛けるようなこともしないから、男子のみならず女子達にも人気があるようだ。今も霊奈は、ちよつと離れたテーブルで女の子の友達数名と、俺と同じ幽奈さんお手製の弁当を食べながら談笑していた。……別に作り笑いをしているようには見えない。そんな笑顔ができるんなら俺にもちよつとは見せてくれても良いんじゃないかね。……つたく、何で俺にはあんなに突っかかってくるんだらうな？

「霊奈。一緒に帰ろうぜ」

「仕方無いわねえ。明日からは一人で行ってよね」

授業が終わると、俺は霊奈と一緒に帰ることにした。というより、家から学校までの道程をまだ憶えていないから、霊奈について行か

ないと家にたどり着くことができないという情けない事情があったんだけどな。

俺は霊奈と並んで教室を出た。

なんとなく他の男子生徒からの視線が痛いような気がする。

しかし、お前達に俺は言いたい。俺も好き好んで霊奈と一緒に帰っているわけじゃないんだってな。

霊奈の奴もムスツとした表情で俺の隣を歩いていやがる。

可愛くねえ。……でも、ひよっとして霊奈は俺と変な噂が立つことを警戒しているのかもしれないな。俺も霊奈のファンの男子にいきなり後ろから刺されることだけは願ひ下げた。

高等部の校門を出た所で、背後から霊奈に声を掛けてきた奴がいた。振り返ると、ちよっとな上……そうだな大学生くらいに見える長身の男が立っていた。

霊奈と同じ金髪に青い瞳で、悔しいが俺よりも相当イケメンだ。

必ず学校に一人はいるよな。こいつみたいに女の子にモテるために生まれてきたような男が……。だが、そいつらに俺は言いたい。俺達のような冴えない野郎どもがいるからこそ、お前らがイケメンでいられるんだってな。感謝しろよな！

しかし、この男。いかにも高そうなスーツを着てモデルのようにポーズを取って立っていることとか、香水の香りがプンプンと鼻を刺激してずっとくしゃみが出そうなこととか、金色の長髪を掻き上げる仕草とかが、いちいち癪に障る野郎だ。

「霊奈、久しぶりだな」

霊奈は一段と不機嫌そうな顔をして、その気障男を睨み返していた。

「そうね。前にいつ会ったのかなんて忘れちゃったけどね」

「それじゃあ、その記憶を呼び戻すために、今晚一緒に食事でもどっかい？」

「残念ながら今夜は忙しいの。明日も明後日もね」

「それじゃあ、いつなら会えるんだい、霊奈？」

「私の名前を呼び捨てにしないでくれる。あんたとはそんなに仲良  
しってわけじゃないんだからね」

「相変わらずつれないなあ」

「他に用が無いのなら私はもう行くわ。真生、行こう」

「おや、隣にいる風体の上がらない男は霊奈の恋人か？」

「ちよつと冗談は止めてくれる！ こいつは私の親戚でやんごとな  
き事情があつて、今、うちで居候をしているのよ」

「ほーう。霊奈の家で居候か。おい、君、名前は何ていうんだ？」

人に名前を尋ねる時は、まず自分から名乗るべきじゃないのか？

俺は思いつきり機嫌悪そうに答えてやった。

「俺ですか？」

「他に誰もいないじゃないか」

「俺はあんたを知らないんでね。どこの誰だか分からない奴に自分  
の名前を言う必要は無いでしょう」

「僕を知らない？ ははは、どうやらとんだ田舎者らしいな。霊  
奈、ちゃんと教えてやってくれよ。僕らは父親同士が一心同体の仲  
で、いずれは僕らもそうなるんだってね」

「さあ、どうだか」

「やれやれ、今日はマイプリンスはご機嫌斜めのようにだ。また出  
直してくるよ」

「あんたの前では私の機嫌は治ることはないはずよ」

「また連絡するよ。チャオ」

気障男はウインクをしながら手を振ると、近くに停めていたスー  
パーカーのようなスポーツカーに乗り爆音を響かせながら走り去っ  
て行った。

どこまでも気障な奴だ。チャオなんて気恥ずかしいことを言  
う奴には初めて会ったぞ。

家に向かつて歩き出すと、俺は霊奈に気障男のことを訊いた。

「霊奈。誰だ、あいつは？」

「柳が下学園大学の鬼崎我蘭おにさきからん。今の総理の息子よ」

「総理つて……総理大臣の？ 俺、総理の息子に喧嘩売っちゃったの？」

「別に気にしなくて良いわよ」

そういや、朝のニュースで鬼崎総理大臣つて言っていたよな。あの疲れたバーコード親父から、どんな遺伝子操作をすれば、あのイケメン気障野郎が生まれるんだ？

「あいつは霊奈の、……その、恋人なのか？」

「なんであんな奴が！ あいつはお兄様と同級生だったから知っているだけよ」

そうなのか。………なんでだろう？ 何となくほっとしたような気分になったのは。

「父親同士が一心同体つて言っていたのはどういう事なんだ？」

「神聖自由党の十三の派閥のうち、お父様が所属している薫風会と、総理の派閥である嵐月会は主流派の中心派閥で、ここ十年はこの二つの派閥から順番に総理を出していて、薫風会と嵐月会の関係も最近はずっと蜜月状態にあるの。つまり嵐月会の代表である鬼崎総理と薫風会の有力者であるお父様は政権維持のためには一蓮托生の仲ということなのよ」

「党の副幹事長で派閥の事務局長の龍岳さんはけっこう偉いんだよな？」

「まあ、偉いつて言うか、『獄門の番人』の責任者でもあるお父様は派閥の裏の事情にも詳しいから、派閥の誰しもがお父様を敵に回したくないって思っているはずよ」

「それじゃあ、龍岳さんも将来は総理の椅子も狙えるんじゃないのか？」

「お父様はそのつもりは無いみたい。お父様は『闇の騎士』上がりで『獄門の番人』の『闇の騎士』達からは絶大な信頼を得ているけど、逆に言うと叩けば埃が出る過去を持っているということなの。だからお父様は裏方に徹する覚悟をされているのよ」

「霊奈は龍岳さんが昔していた仕事がどんなことを訊いたことは

あるのか？」

「訊いても教えてくれないわ。色々あるんでしようけど……。でも、私はお父様を軽蔑したりはしない。むしろ尊敬しているわ。この国の、そしてエンマの平穩を守るために日々戦っておられるんだから」

「そうか。……でも、龍岳さんもそれだけ人望があるんだから一代限りにするのはもったいないよな。やっぱり龍真さんが後継者とされていたんだよな？」

「もちろん。お兄様は自他ともに認めるお父様の後継者だったわ。

でもそのお兄様が亡くなられた今、私がお父様の跡を継がなきゃいけないって思っているの」

「靈奈が？ まだ未成年なの？」

「ソウルハンターになれば未成年者でも選挙権も被選挙権も与えられるのよ。私はもう政治に参加することができるという意味では成人と一緒に」

「そうなんだ。でも生まれた順番からいうと長女の幽奈さんが後継者になるという意見はなかったのかい？」

「幽奈はあの性格だから政治の世界には向いていないと思うし、本人もその気は無いみたい。それに体調のこともあるし……」

幽奈さんは心臓が弱く、激しい運動をすることができないらしい。政治家もけっこう激務だろうからな。それに幽奈さんが国会の討論で政敵を厳しく論破する姿は想像できないし、幽奈さんのあの声の調子で演説をされていたら、みんな微笑みながらそのまま眠ってしまいそうだ。

「妖奈も小さい頃から芸能界で活躍したいって夢を抱いて頑張ってきていたから、やっぱり私がやらなきゃいけないって決めているの」

幽奈さんは仕方が無い一面もあるが自分の好きな家事に専念していて、妖奈ちゃんも夢に向かって邁進中だ。その二人のために靈奈が跡取りになると言っているが、靈奈の夢は最初からそうだったんだろうか？

「でも霊奈は龍真さんが生きていた時から龍真さんを押しつけて自分が龍岳さんの後を継ごうと思っていたわけじゃないだろう？」

「そ、そりゃそうよ」

「だったら他にやりたいこととかなかったのか？」

「えっ、……………お兄様の代わりにお父様の後を継ぐことが今の私がしたいことよ」

「だから、龍真さんが死んでしまったから、霊奈なりの使命感に燃えて自分が跡取りになるって決めているんだらうけど、龍真さんがいた時はそうは思っていなかったんだらう。何か他にやりたいことがあったんじゃないのか？」

「……………うるさいわね。あんたには関係無いでしょ！」

霊奈は足を速めて歩き出した。

何だか霊奈の頬がちよつと染まっているように見えたのだが気のせいかな？

でもここで霊奈とはぐれると家まで帰ることができない。

「ちよつと待ってくれよ、霊奈」

俺も足を速めて再び霊奈の隣を歩き出した。

しかし…………、よく考えると俺は女の子と一緒に登下校しているんだよな。エロゲでも親しくなる第一のフラグのはずだ。現実にそんな経験のなかった俺にとつては夢にまで見た出来事なんだからもつと喜んでいいはずじゃないか？ ……でも、隣で歩いている女の子が見るからに不機嫌な顔をして無言で歩かれても全然嬉しくないぞ。そんな気分のまま家に着くと、俺は車庫に置いている霊奈のエア・スクーターが目にとまった。

「霊奈」

「何？」

歩いている間に若干は霊奈の機嫌も直ったみたいで、普通に返事をしてくれた。

「うちの学校ってバイク通学は禁止なのかな？」

「別に禁止されていないと思うけど」

「それじゃ、エア・スクーターを通学に使えば、あつという間に着けるんじゃないか？」

「エア・スクーターはソウルハンター専用の乗り物なの。ソウルハンターの仕事以外では使用禁止なのよ」

「そうなのか。でもあんな便利なものがどうして使用禁止なんだ？」

「あんたは獄界に来て、飛行機やヘリコプター以外で、エア・スクーターのように空を飛ぶ乗り物を他に見た？」

SF漫画でよく出てくる未来的な景色に不可欠なものと言えば、ビルとビルの間を飛び交っている空飛ぶ車だよな。エア・スクーターが作れる科学力を持った獄界になぜ空飛ぶ車が無いんだ？」

「そういえば見てないな」

「そうでしょ。つまりエア・スクーターは一般の人は乗れない特別な乗り物なのよ」

「値段が高いのか？ それとも免許を取るのが超難関だとか？」

「違うわよ。エア・スクーターを動かすためには、ソウルハンターのよう自由に幽体離脱ができるくらいの霊エネルギーが必要とされるからよ」

「エア・スクーターって霊エネルギーで動いているのか？」

「そうよ。ソウルハンターは一般の人よりも高い霊エネルギーを発している、エア・スクーターはそれを動力源にしているの」

霊奈と俺は車庫に入ってエア・スクーターに近づいて行った。

「このハンドルの中心にあるのがロックを外す生体認証とエンジンをかけるための霊エネルギーセンサーよ」

霊奈がハンドルの中心部分に右手をかざすと静かにエンジンがかかり、もう一度、手をかざすとエンジンが切れた。

「そうか。……それじゃ普通のスクーターとかは無いのか？ 通学は駄目でも普段移動するのにあれば便利だよな」

「事故で死んだのに懲りない奴ね」

「ちゃんと安全運転に心掛けるよ」

「残念ながら普通のバイクとかスクーターは家には無いわよ。真生



が必要だと思つのなら自分で買えば」

だから俺はお金を持って無いの。……でもまあ今すぐに必要なものでも無いからな。しばらく我慢するか。

「俺もこれに乗れたらなあ」

俺は何気なくエア・スクーターのハンドルの中心部分に右手をかざしてみた。

んっ？ ……エンジンがかかった音がした。

「えっ？」

霊奈も驚いていた。

「……あんたも一回死んでいて幽体離脱をしているのと同じ状態を経験しているから、これを動かせるだけの霊エネルギーを持っているのかもしれないわね」

「俺にもこれを使えるってことだよな？」

「駄目よ。ソウルハンターにだけ支給されているものだから」

「そうか」

欲しい玩具がもらえなかったみたいに落胆した俺に霊奈が言った。

「あんたもソウルハンターになれるかもしれないわね」

「俺が？」

「うん。素質があるかもね」

それって只の慰めの言葉なのか？ それとも本当に見込みがあるのかな？

扉を開けて玄関に入ると、幽奈さんの優しい「お帰りなさい」の出迎えが待っていた。高校でクラブ活動もしていなかった俺は、パートで働いていたお袋やテニス部に入っていた美咲よりも早く帰宅することが多かったから、誰かに「お帰り」と言ってもらえることは久しぶりだった。やっぱり誰かが待っている家に帰るって良いよな。

「真生さん、ちょっと部屋まで来ていただけますか？」

「幽奈さんの部屋へですか？ いや、まだ明るいですし……」

「あつ、いえ。真生さんのお部屋です」

霊奈の冷たい視線が俺を突き刺す。お願いだからそんな目で俺を見ないでくれ。

幽奈さんと霊奈と一緒に二階の俺の部屋に入ってみると、何もなかった部屋には家具一式が運び込まれていた。ベッドにタンス、勉強机に椅子、LANケーブルらしきケーブルに繋がったパソコンもあった。

「私が勝手に置いてしまつて使い勝手が悪いかもしれませんが勘弁してくださいね」

それにしても霊奈と違ってどこまでも奥ゆかしい幽奈さんだ。

「俺の方こそこんなにまでしていただいてすみません」

「どうせ住む所が見つかるまでの間の居候なんだから、ここまでしてあげる必要はなかったんじゃない？」

霊奈。お前はとつと部屋で着替えてこい。俺は幽奈さんにお礼を言っているんだ。

「もし住む家が見つかったとしても、この家具とかはそのまま持つて行ってもらえるでしょう。真生さんは着の身着のままどこっちの世界に来てしまつたんですものね」

幽奈さんの聖母のような微笑みはこの世の中から理不尽さをなくすね。両手を合わせて拝みたくなってきたぜ。

「何か不都合があればすぐにおっしゃってくださいね」

「はい、分かりました」

「真生。勉強机も来たんだから早速今日の宿題をやっておきなさいよー」

幽奈さんの癒される微笑みを見た後では、俺を睨んでいる霊奈の顔つきは地獄の鬼も逃げ出すほどに見えるぜ。

「分かっているよ。もううるさいな」

「真生の事を心配して言つてあげているのに何よー！」

「本当に心配してくれているんなら霊奈が勉強を教えてくれよ。今日の宿題だつて難しすぎて全然分からないぞ」

「自分でやらないと身に付かないでしょ」

「まあまあ二人とも。美味しい羊羹を買ってきたから一緒に食べましょう。霊奈も着替えてらっしゃい。真生さんの着替えはタンスの中に入れておきました。私の趣味でとりあえず買ったものですからお気に召さないとはいませんが……」

「とんでもないです！ 幽奈さんのセンスは俺にぴったんこですから！ はははは」

俺が幽奈さんに愛嬌を振りまくと霊奈が怒るの定理は普遍的だった。

「何、にやついているのよ！」

「良いだろう、別に。それじゃあ霊奈も俺をにやつかせるようなことを言ってみるよ」

「何よ！ ばか」

その捨てぜりふを吐いて霊奈は隣の自分の部屋に入って行った。

獄界に来てから霊奈に何回「馬鹿」と言われたのか、既に両手では数え切れないはずだ。

「それではいつでもダイニングに降りて来てくださいね」

霊奈さんはちゃんとお辞儀をして部屋を出て行った。いつも微笑んでいて優しい言葉遣い。年下の俺にも敬語で話をしてくれる幽奈さんは霊奈に傷付けられた俺がその傷を癒すオアシスだ。

それよりパソコンだ。俺は早速パソコンを立ち上げてみた。

久しぶりだ。たったの二日ぶりだったのだが、しばらくマウスを触っていない気がする。

出てきた画面は何となくウィンドウズに似ており、ちょっと操作するとすぐに取り扱い方法が分かった。並列世界といってもどっちの世界にいるのも人間に代わりはないわけだ。人間が使い勝手が良いように考えるものって、やっぱり自然と似てくるものなんだろうな。

ネットにもちゃんと接続できた。まずはやっぱりエロサイトを……。いやいや、居候させてもらっている身でいきなり昼間から

エロサイトはまずいだろう。……夜になってからにしよう。

とりあえず検索サイトから、この世界の情報を集めてみよう。二  
ユースサイトをいくつかサーフィンした後、俺は靈魂管理庁のホー  
ムページにあった記事に目を止めた。

「エンマ暦二〇三一年度『靈魂探索捕獲者』認定試験のご案内」

ソウルハンターの認定試験か。どんなことをするんだろう？

何々

年齢とか学歴による制限は無いみたいだな。だから

靈奈のような高校生だってソウルハンターになれるわけか。第一次  
試験の筆記試験と実技試験に合格した者が、第二次試験である実技  
演習を受けることができるようだ。過去の合格率も出ているな。：

………倍率百倍！ 狐林が言っていたとおりだ。

靈奈の奴、こんな超難関の試験を通っているのか。もう高校にな  
んて行く必要は無いんじゃないか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3327z/>

---

Powergame in The Hell（上）

2011年12月11日14時49分発行